筑波大学新聞

第333号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

全86国立大学の運営費交付金等の総額

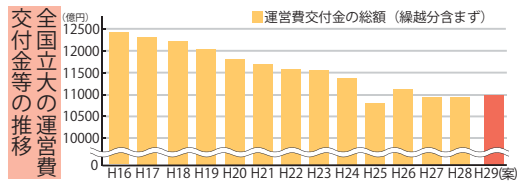
法人化後で初の増額へ

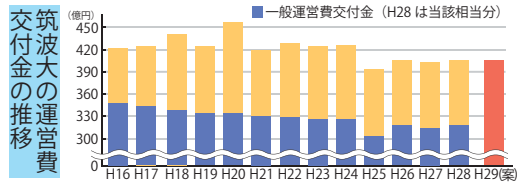
平成29年度予算案で、国から全国立大学法人に配分される運営費交付金等の基盤的経費の総額が、25億円増額された。文部科学省によると16年の国立大の法人化以来、実質的な増額案は初。（秋田耕平＝社会学類1年、田中開＝教育学類3年）

同省によると、運営費交付金の総額は、平成16年4月の国立大学の法人化以後、25年度に東日本大震災の復興支援の影響で大幅に削減された分が増額となった26年度を除けば、27年度まで減額が続き、28年度は前年度と同額だった。12月に閣議決定された来年度の予算案は、純粋な運営費交付金が約20億円減少する一方で、28年度に新設の支援金枠「機能強化促進費」を含めると、25億円増の1兆970億円となった。

増額案を受け、同省国立大学法人支援課の安井順一郎企画官は「実質的な増額案は法人化後で初めて。厳しい国家財政の中でも風向きが変わってきたと感じる。国立大の社会的役割が理解され始めたのではないか」と話した。また筑波大の永田学長は「文科省などの努力の成果としつつも、新設された機能強化促進費を除く純粋な交付金額は若干削減されたことを指摘し、「今後は純粋な交付金も増額に転じることを期待したい」とした。予算案は衆参両院での審議を経て3月にも可決される見通し。

一方、筑波大の運営費交付金は、法人化後の16年度には422億円だったが、大半を占める「一般運営費交付金」が年約1%ずつ削減され続けたことが影響し、28年度は407億円（一般運営費交付金に相当する額は318億円）だった。来年度の筑波大の交付金総額は406億円となる。





文科省 再配分枠を公表

文科省は2月12日、全国立大学に運営費交付金から拠出させた総額約100億円の資金について、各大学への再配分率を公表した。資金のうち45億円は、同省が28年度に新設した「機能強化促進費」に当てられ、同じ割合で各大学に再配分される。筑波大の再配分率は91・7%となり、約3億8000万円を拠出し、約3000万円減少して再配分される。

同省は28年度から、86ある国立大の交付金の重点支援の枠組みとして、「地域に貢献する取り組み」を行う大学（「地域」）、「全国的な教育研究」を行う大学（「全国」）、「世界で卓越した教育研究」を行う大学（「世界」）の3つの枠組みを創設。枠組みごとに異なる割合で運営費交付金を拠出させ、その総額約100億円を、大学独自の取り組みに応じて各大学に再配分する。

再配分率は各大学が文科省に提出した、今後の大学戦略などの評価結果や達成状況で決まる。

筑波大は学位プログラム制への移行や外部機関との連携強化など5項目の戦略を提出したが、Aから E までで示される戦略の評価結果では、Bが2項目、Cが1項目、Dが2項目だった。達成状況は全て高い評価を受けたが、設定目標の妥当性などの点で評価が鈍ったことが、全体的な評価低迷と減額の原因と見られる。

評価結果を受け、永田学長は「今回は評価の仕組みが筑波大の提案した戦術に合わなかったが、来年度からは評価の仕組みが変わるため、成果が純粋に評価される。産学連携など全ての分野で着実に成果を出していきたい」と話した。

政務活動費を情報公開請求

基準は「議員の裁量」

つくば市議会

地方自治体の政務活動費のあり方が問題となる中、本紙は11月、つくば市に同市議会全9会派（調査時点）の平成27年度政務活動費＝ 9 ＝の領収書の情報公開請求を行った。請求で得た同市全会派の収支報告書の領収書のコピー全312枚を詳細に分析した。（井口彩、新田萌夏、平嶋健人＝社会学類4年、11面に関連記事）

情報公開請求では、行政文書開示請求書に請求資料の名称など必要事項を記入、請求の認否を待つ。この結果、11月16日に同市議会全9会派の領収書コピーを受け取った。9会派は▽つくば市民政策研究会▽つくば自由民主党・つくば維新の会（現・自民つくばクラブ・新しい風）▽統一会派　つくば政清会・民進党の会▽公明党▽日本共産党▽つくば・市民ネットワーク▽山中八策の会▽新社会党▽筑峰クラブ。

まず領収書で自立したのは議員が政務活動費で支払う際にポイントがたまるクレジットカードを利用したり、ポイントカードの提示をしていたことだ。

ある会派の領収書では、資料作成費として2015年7月と2016年1月に印刷用紙を購入した際、ポイントカードを提示し、各33、10ポイントが付与されていた。同市議会事務局によると、現在ポイント獲得に関する規定はなく、議員の裁量によるという。だが、9会派のうち8会派が書籍などの「資料購入費」を計上していたが、ある会派では支給額が52万3004円が新聞代などの同購入費に充てられていた。書籍などの購入目的は記載がなかった。同市議会事務局によると資料購入費は条例に規定があるものの明確な基準はなく、議員の裁量によるという。

また、9会派のうち8会派の調査活動などに必要な経費として支給される。つくば市では一議員につき月額3万円。各会派は交付された翌年度の4月中に、使途をまとめた収支報告書を領収書などの証拠書類とともに提出する。全国では2014年に兵庫県議会議員が昨年度の政務活動費を不正利用していたことを皮切りに、富山県などで不正利用が発覚している。

9 政務活動費＝地方議会議員の裁量によるという。

蹴球部インカレ制す

1部復帰から1年での快挙

12月18日の全日本選手権（インカレ）決勝で、筑波大学は日本体育大を8－0で下し、優勝した。筑波大は2年前に2部に降格したが、昨年1部に復帰。復帰後1年での日本一となった。（8面に関連記事）

歓喜に沸く蹴球部関係者ら（右）
ゴールを決め、抱き合う選手たち（左）

【浦和駒場スタジアム（さいたま市浦和区）で小宮山瑛生＝社会学類2年、写真も】試合終了間際の後半44分、途中出場の高柳昂平（体専4年）からパスを受けた中野誠也（同3年）がゴールネットを揺らした。試合終了のホイッスルが鳴り響いた。歓声を上げて抱き合う選手たちの目に飛び込んできたのは「大学サッカーの頂点へ」と大書された横断幕だった。

2部降格からわずか2年での劇的なインカレ制覇。創部120周年を迎えた今年度のスローガンは「不撓」だった。どんな困難や苦労にも、決して屈しない。部員全員で決めた。

試合後、選手たちと監督は、口々に「早川史哉」の名前を挙げた。右皿骨折で療養中の前主将。彼もまた、「不撓」の精神を胸に、病室で奮闘を続ける。控えベンチには、必ず早川のユニフォームがあった。「24時間病気と闘っている早川さんに、自分たちの方が勇気をもらう」（中野）。早川は病室から選手たちに絶えずエールを送っていた」と話すのは小井土正亮監督（体育系・助教）。試合後、全員で早川へ

決勝をピッチの外から支えたのは、筑波大学応援団。バスツアーが計画され、200人超のサポーターが選手たちに声援を送り続けた。後半8分、2点目のゴールを決めた中野は、サポーターが「不撓」「大学サッカーの頂点へ」などの横断幕を掲げる応援スタンドに駆け寄り、喜びを爆発させた。横断幕の中には、「今日も闘おう、早川史哉と共に」の文字もあった。

横断幕には、筑波大生らが思い思いに寄せ書きした「日本一の景色を見よう」「筑波が大好きだ」などのコメントも見られた。今大会、最優秀選手賞に輝いた中野は「横断幕を見ることで筑波大全体の期待を感じ、奮い立った」と振り返る。

「強い筑波の歴史を作り上げてほしい」。試合後、主将の高柳は後輩へ思いを託した。4年生はこのインカレで引退する。次世代を担うのは、決勝でもハットトリックを決めた中野、北川柊斗（体専3年）ら3年生。「古豪」。そう言われてきた蹴球部は、今はもう「古豪」ではない。

の応援歌を歌い、エールを届けた。

筑波おろし

最近授業で、「戦争を起こさないために、一人ひとりが出来ることは何か」を話し合った。「正しい歴史を学ぶ」「戦争の惨禍を忘れない」……。さまざまな意見が出たが、なかなか腑に落ちる答えが見つからない。だが最後に全員が納得したのは「他者の痛みに対する想像力を持つ」ということだった▼そのとき論じたのは、世界で続く戦争を他人事と見なしている限り、いくら反戦を唱えても中身の伴わないものになるだろうということだ。イラクでシリアで、人々は何を愛し、何に怒り、何を大切にして生きてきたのか。そんな彼らの「生」を想像する力があれば、戦争で彼らが受けた痛みも理解できる。そしてその理解は、惨禍を繰り返してはならないという思いにつながる▼その想像力を育む手段の一つに、今自分が学ぶ文学があると思う。最近日本では、文学や思想など人文社会系の学問の存在意義が問われている。しかし、一人ひとりの多様な生の細部を描き、他者への共感を喚起する文学を知れば、他者の痛みを理解することがより容易になる▼フランスの哲学者サルトルはかつて、「アフリカの子どもが餓えで死ぬ時、文学に何が出来るか」と世に問うたが、ある日本の文学者は「文学は、想像力と他者に共感する力を育てる。その力は、戦争が起きている今こそ求められている」と答えた。文学の可能性を信じたい。

紙面から

東大と共同運営　国内最速スパコン始動　2
放送Nコン　THKが文科大臣賞　5
バレー全日本インカレ　女子　準優勝　8
ラート全日本選手権　男女とも優勝　9
宿舎を問う　粗大ゴミ置き場　正式設置へ　10
人工衛星「結」2号　16日に宇宙へ放出　10
ミニ特集　3
つくば市と学内　防犯カメラ事情
特集　6,7
退職教員インタビュー＆旅立つアスリート

国内最速スパコン稼働

国内初、大学間で共同運営

筑波大学計算科学研究センターは12月1日、東京大学と共同で国内最高性能のスーパーコンピューター（スパコン）となる「Oakforest-PACS」（OFP）の稼働を東京大柏キャンパス（千葉県柏市）で始めた。（岡田優太＝社会学類2年、写真も）

両大学が所有するスパコンの名前をかけ合わせて命名されたOFPは、1秒間に2・5京回の計算速度を誇る。これまでの国内最速だった理化学研究所の「京」の1秒間に約1京回を大幅に上回り、11月に発表されたスパコン性能の世界ランキングで国内で最速を達成、また世界で第6位となった。

運用を開始したスーパーコンピューターの「OFP」（12月19日、東京大柏キャンパスで）

構想から3年かけて稼働にこぎつけたOFPは、市販の部品を使用したり、コンピュータ内部に使われている半導体技術の進歩により、全ての部品を独自開発し、その開発と運用に1000億円以上が必要だった「京」と比べて、大幅に費用を抑えた。スパコンの調達や運営は日本の大学で初めて共同で行い、運用期間は5年半。運用費約72億円は両大学が拠出していく。

今回の稼働について筑波大計算科学研究センターの梅村雅之センター長は「一大学だけでこの規模のスパコンを運用することは予算的にも非常に難しい。以前から計算機科学などの分野で協力してきた東大とだからこそ、今回の共同運用が可能になったと話した。

筑波大は現在、OFPのほかに複数のスパコンを所有している。OFPは汎用性の高いスパコンとして使われ、他のスパコンは筑波大が独自に進めてきたコンピューターの新たな技術の研究などに使われる。

また、OFPは4月まで試験運用をした後、他の大学や研究機関などにも貸し出す考えで、素粒子や地球温暖化などの研究に使われる。筑波大でもすでにOFPを用いた研究が数十件ほど予定されているという。

運用開始を受け、同センターの朴泰祐副センター長は「OFPを用いた研究によって『スパコンのノーベル賞』とも呼ばれるゴードン・ベル賞も狙っていきたい」と話した。

大学新聞コンテスト 2位

朝日新聞社賞　記事・連載とも高評価

その年の最も優秀な大学新聞を決める「第6回大学新聞コンテスト」（関東学生新聞連盟主催、朝日新聞社など後援）の一般新聞部門で12月、本紙は連載部門、記事部門ともに2位を受賞した。本紙の候補作は、連載部門が「大学と軍事研究」、記事部門が筑波大学周辺の車上荒らしに関する記事だった。1位はともに東京大学新聞だった。同コンテストの表彰式が昨年12月21日、朝日新聞社東京本社（東京都中央区）で行われ、本紙は完成度の高さなどが評価された。（秋田耕平、写真も）

コンテストで2位になった本紙（1月17日、筑波大学新聞編集室で）

連載部門2位の本紙キャンペーン「大学と軍事研究」は本紙325号から332号まで連載し、筑波大生へのアンケートなどから、学生の軍事研究に対する意識を明らかにした。また記事部門2位の本紙330号の車上荒らしに関する記事は、筑波大周辺で発生した一事件を機に、一連の車上荒らしの全体像を明らかにしたほか、犯人が使ったと見られる脱出用の「緊急ハンマー」を用い、実際に車両の窓ガラスを割る実験をしたことなどが評価された。一方、朝日新聞社賞を受賞した東京大学新聞の連載は東大周辺の人々の魅力に迫った「地域の顔」、記事賞はジェンダーに関するものだった。

筑波大学新聞（現発行部数約2万部）は1974年10月創刊。学内のほか市役所や銀行などつくば市内各所でも配布されている。小宮山瑛生・本紙編集長（社学2年）は「今後も学内だけではなく、社会の状況を取材し、開かれた紙面を目指したい」と語った。

電子図書館を議論

2つの国際会議開催

アジア太平洋地域の情報学分野や電子図書館研究に関連する2つの会合が12月5―9日に筑波大学の春日エリアと大学会館で同時に開催された。

会合には杉本重雄教授（図情メ系）と森嶋厚行教授（同系）が組織委員会の共同議長として参加したほか、筑波大からも複数の発表が行われた。

5―6日にはアジア太平洋地域の情報学分野の大学院の交流・協力関係を高めることを目的に国際フォーラム「APIS」を開催。筑波大をはじめ、中国の北京大学など10カ国から約20の大学が参加し、図書館情報学に関連した、博士課程の学生の研究発表などが行われた。筑波大からは小南理恵さん（図情メ後期1年）が、20世紀初頭の米国での図書館司書と出版社の協力関係に関する発表を行った。

7―9日には最先端の電子図書館に関する国際会議「ICADL」を開催。18カ国から約150人の研究者が参加した。同会議では、近年、学術論文などをインターネットで誰でも無料で閲覧できる仕組みが急速に発展を遂げる中での情報やデータなどに関する科学技術についての発表や、意見交換が行われた。8日には、自然災害分野における情報技術を研究する専門家によるパネルディスカッションも開催。アジア太平洋地域で相次ぐ自然災害への対処法を情報学の観点から議論した。

8日のパネルディスカッションで司会を務めた森嶋教授は「非常に活発な議論ができた。このような議論は今後の自然災害に備えるうえで重要。特に災害の多いアジア太平洋地域で、国際的な協力体制を構築することは不可欠であり、今回の会議がそのきっかけとなればと思う」と話した。（益本健太＝人文学類1年）

推薦入試で出題ミス

医学群の2学類で合否に影響なし

筑波大学は11月29日に実施した推薦入試で、一部の学類の問題に出題ミスがあったと発表した。

出題ミスが判明した学類は医学類と医療科学類。医学類では「小論文（1）―課題Ⅱ―問題1―問2」の数列に関する問題の中で、高等学校の学習指導要領の範囲外の問題を出題。一般に高校で学ぶ知識では解答できない問題だった。

また、医療科学類では、小論文（1）の問題冊子5、4ページの英文で、カンマの誤挿入や脱落など、計3カ所でミスがあった。

入試課によると、医学類の出題ミスは外部からの指摘で判明。また、医療科学類では29日の試験終了後、学類での問題確認中に判明した。これらの誤った出題をした部分に関係のある問題については、受験者全員を正解として扱い、合否に影響はなかった。

今回の出題された入試問題は、各学類の教員数人で構成される入試作問委員によって作成された後、学類の入試関係委員会で複数回の確認を経ていたが、ミスを発見することができなかった。

同課によると、医学類の問題では、問題の作成時に出題分野に詳しい学内の教員らに意見を求めて修正を行っていたが、教員の中に高校で学ぶ知識の範囲内で解答できるという誤った認識があったという。

今回の出題ミスを受け、伊藤眞副学長（教育担当）は「再発防止のために、出題体制の抜本的な見直しも含めた検討をしていきたい」と語った。（秋田耕平）

人社系研究発信月間

ＩＣＲがシンポなど開催

「文系学者に何が出来るか」をテーマに筑波大学の人文社会国際比較研究機構（ICR）は、11月を中心に「人文社会系　研究発信月間」を設け、研究会などを行った。この中で、東京キャンパス文京校舎で11月5日行われたシンポジウムでは、「逆境の中にこそ夢がある」と題して元筑波大教授の蒲島郁夫・熊本県知事が講演。また、12月10日のシンポジウムでは、筑波大の研究者らが「人文社会系研究の活性化や発信に何が必要か」などを話し合った。「月間」は毎年設ける方針で、入場は無料。

文部科学省の審議会は2014年8月、国立大の組織改革案として「教員養成系や人文社会系学部・大学院の組織を排し、社会的要請の高い分野に取り組むべきではないか」という内容を提示。これが「文系廃止」に結びつくのではという懸念を生んでいる。

「月間」はこの懸念に対し、文系研究者に何が出来るかを考えるもので、11月のシンポジウムでは「逆境からイノベーションへ」をテーマに討議。また、12月のシンポジウムでは筑波大の研究者らが人文社会系の研究者について「一般の人々にわかる言葉で発信する努力が必要」「研究者が自らのタコツボから出て、協働して発信をすべきだ」などの議論を行った。

筑波大人文社会系では10～12月の間、同じテーマで学内で約20の研究・講演会などが行われ、600人以上が参加した。（福原直樹）

登壇者に質問する参加者（12月10日、東京キャンパス文京校舎で）＝主催者提供

仏で筑波大生不明

12月4日から

フランス東部ブザンソンに留学中の黒﨑愛海（なるみ）さん（国総3年）が、12月4日から行方不明になっている。仏警察は、チリ国籍の黒﨑さんの元交際相手の男を、行方不明の容疑者として捜査している。

黒﨑さんは12月4日夜、男とブザンソン郊外で食事し、2人で学生寮に帰ってから行方不明となった。

男は既にチリに帰国。仏当局はチリ当局に男の身柄引き渡しを要求中だが、チリ当局は応じていない。

筑波大は事件の情報収集に努めているほか、5日には全学生にメールを送付し、学内外でのメディアの取材に対して冷静な対応を求めている。（本紙取材班）

古市さん講演

社会学者の古市憲寿さん（31）が12月2日、1H棟で講演した。また後半には古市さんと上井隆義教授（人社系）、野上元准教授（同系）の3人による座談会が行われた。

講演の中で古市さんは、現代の若者を語る論調には、地方の視点が欠けていることなどを指摘した。

また、古市さんは政府の統計で、近年の若者の「生活満足度」が10年前より上昇していることから、現代の若者が相対的に「幸福」であるとも指摘した。

講演を聞いた女子学生は「自分自身も今の生活にあまり不満を感じていないため、若者の幸福度が高まっている意見に共感した。また講演の中で言っていた統計を分析して社会を読み解く方法について興味をもった」と話した。（秋田耕平、12面に関連写真）

催事

キャリアインタビュー2016

1月28日（土）に1H101、第一エリア食堂で開催。午後0時半から1H101で受付開始、午後1時から開会する。

筑波大学就職課が主催し、筑波大OB・OGが就職活動での質問に応じたり、情報提供を行う。メインイベントのOB・OGとの交流会のほか、「広い視野を持った職業の選択」をテーマにしたパネルディスカッションなども行う。

参加登録用ウェブページのQRコード

定員は先着120人。事前の参加登録が必要だが、定員に満たない場合は当日参加も可能。

問い合わせ＝syushokuka@un.tsukuba.ac.jp（筑波大学就職課）

つくば市と学内の防犯カメラ事情

犯罪抑止やその摘発で、防犯カメラの有用性が指摘される中、つくば市や筑波大学内でも防犯カメラの台数が増え続けている。つくば市役所やつくば中央署、さらに学内の有識者などに取材し、地域の防犯カメラ利用の実態や、そのあり方を検証した。（越智小夏＝比較文化学類、橋野朝奈＝日本語・日本文化学類、小宮山瑛生、前名裕一＝社会学類）

4年で95台設置

■つくば市

◆設置の実態

つくば市危機管理課によると、同市には平成24年度以前、公道上に市役所が設置した防犯カメラは皆無だった。だが、カメラの有用性がマスコミなどで取りあげられたことや、つくば駅前周辺の犯罪件数が多いことを受け、同年度、カメラ設置を開始。昨年度までに計72台を設けた。人口1人あたりで見ると、つくば市（人口約23万人）のこの台数は、水戸市（同約27万人）の14台を大幅に上回る。つくば市の場合、設置場所はつくば駅、研究学園駅などのつくばエクスプレス各駅前広場や、つくば駅周辺のペデストリアンデッキが中心。設置場所は人の行き交いが多い所や、犯罪が多発する地点の中から警察と協議し決めている。また、今年度は吾妻中学校（つくば市天久保）周辺から、しらかし公園（同市天久保）周辺に続く市道を中心に23台が増設される。

◆高額な費用

同課によるとカメラ設置に対する市民からの抵判はなく、むしろ、設置を要望する声が多数寄せられている。「警察と協議し、慎重に設置を進めている」という。

また要望を受けての設置は行っていない。

つくば市のカメラには「十分な働きをしてもらい、防犯に可能な限り役立てたい」（同課担当者）という思いが込められている。このため、画素数、記録容量など高品質のものを選んでおり、工費を含めると設置に1台60万円以上かかることもある。また、修理や買い替えにも費用がかかり、数年後には現在のような年数十台ペースでの増設は難しくなるという。

そのため同課によると、「カメラの防犯効果を高めるためには、設置の事実を人々に知らせることも重要」と話し、設置の際、近くに「防犯カメラ作動中」と書かれたステッカーも設けているという。

◆今後の課題

同課によると、これまでに設置した駅周辺などのほかに、今後は市民の要望をふまえて、小中学校、高校などのスクールゾーン周辺への設置も視野に入れていく。また、これまでつくば市では設置に関する明確な基準を設けていないため、現在、市独自の基準を検討中であり、今年度中をメドにガイドラインなどを取りまとめる予定だ。

今年度つくば市が新たに23台の防犯カメラの設置を行う市道（　　）

■識者の声

防犯カメラの設置について、都市計画や犯罪学が専門の雨宮護准教授（システム情報系）に聞いた。（聞き手＝前名裕一、越智小夏）

――カメラ設置のメリットとデメリットは。

メリットとしては、犯人に「見られている」という意識を与え、犯罪を起こす意欲を失わせることがあげられる。

また、カメラに記録されていた画像を解析することで、事件の解決に貢献するという点がある。このような犯罪への直接的な効果の他にも、市民の犯罪に対する不安を解消・軽減する効果も期待される。

その一方で、運用ルールが十分に整っていないと、画像が管理者によって恣意的に利用される懸念があったり、カメラがあることで犯罪が多い地域とされ、地域のイメージが損なわれる恐れもある。

カメラの効果を過信することもよくない。

集合住宅ではカメラがあることで安心してしまい、戸締まりなどの住民自身の犯罪対策がおろそかになる恐れがある。

――今後の課題は。

カメラ設置の事実を（住民などに）知らせることは、カメラの効果を高める上でも、プライバシーに配慮する上でも重要だ。自治体の中にはカメラの存在をステッカーや道路のペイントなどで知らせているところもある。

私の講義を受講した学生に尋ねてみたところ、およそ半分は夜道が怖いなどの理由でカメラ設置に賛成していた。

一方で半分の学生からは、カメラが生活域周辺に設置された場合、プライバシーが侵害されるなどの反対意見があった。

このように、カメラの設置は、状況によっては賛否が分かれることがある。行政は安易に設置するのではなく、犯罪の件数や分布なども参考に、透明性あるプロセスのもとでカメラを設置していくことが重要だ。

指針定めて設置すべき

防犯カメラが作動していることを示すステッカー（1月16日、つくばセンター広場周辺で）＝橋野朝奈撮影

設置の周知が重要

◆プライバシーに配慮

設置は市民のプライバシーに最大限配慮しており、設置の際は住宅などの建物側にレンズが向かないようにしているという。また同課は「カメラの防犯効果を高めるためには、設置の事実を人々に知らせることも重要」と話し、設置の際、近くに「防犯カメラ作動中」と書かれたステッカーも設けているという。

◆今後の課題

同課によると、これまでに設置した駅周辺などのほかに、今後は市民の要望をふまえて、小中学校、高校などのスクールゾーン周辺への設置も視野に入れていく。また、これまでつくば市では設置に関する明確な基準を設けていないため、現在、市独自の基準を検討中であり、今年度中をメドにガイドラインなどを取りまとめる予定だ。

■筑波大学内

学内でも設置進む

学生生活課が管理している建物では現在、防犯カメラは文化系サークル会館（文サ館）や体育系サークル会館（体サ館）、課外活動練習施設、学生宿舎に設置されている。

筑波大のリスク・安全管理課によると、学内のカメラ設置は学類や学生部など、各建物の管理者が担当しているという。

一方、学生生活課によると、昨年の夏季休業中、文サ館で、学生の所有物が盗まれる事件が発生。

これを受け、同課はこれまで文サ館に2台しか設置していなかったカメラを新たに2台追加で設置。また、課外活動練習施設にも新たに2台設置し、再発防止に努めている。これらの設置は、各施設の出入り口付近に掲示したり各団体の責任者らに告知している。

また学生宿舎の場合、建設当初はカメラが設置されていなかったが、自転車の盗難事件が続いたことを受け、平成21・22年度に平砂、追越、一の矢地区に計32台を設置した。

一方、同課によると、今年4月から平砂地区で運用が始まる、留学生と日本人学生が同居する宿舎「グローバルヴィレッジ」には、敷地を取り囲むフェンスに沿って、カメラを20台設置する予定だ。

同宿舎は、建設と管理を民間業者に委託。その際、大学側が提示した防犯安全基準に基づき、委託された業者の提案を受け、カメラの設置を決めた。

普段から文サ館を使用する学生は「防犯カメラの増設は知らなかった。犯罪の抑止力にするため、さらなる周知が必要では」と話した。

また宿舎に住む女子学生は、「盗撮や侵入事件があったため、（カメラは）必要だと感じている」という。

一方、「宿舎を管理する上で防犯カメラが必要なら仕方がないが、悪用されないか心配だ」とも話していた。

同課によると、カメラの記録情報は厳重に管理し、事件発生時に警察署から捜査協力を受けた場合、対応することとしている。

防犯カメラが2台新設された文化系サークル会館（1月18日、同館前で）＝秋田耕平撮影

防犯カメラは「万能」？

■警察

つくば市では防犯カメラで記録された情報は際にどのように使われ、どのような効果を発揮しているのか。また防犯カメラは「万能」なのだろうか。つくば中央署の小澤嘉弘生活安全課課長に話を聞いた。

◆事件発生ゼロに

同課によると、これまでつくば駅周辺のペデストリアンデッキ上では路上強盗（ひったくり）が多発していたが、カメラの設置以降、その周辺では事件は発生しなくなった。一方で、カメラのない場所では相変わらず事件が起きており、その犯罪抑止力は明らかだった。

また、一昨年末にペデストリアンデッキ上で痴漢事件が発生した際、現場のカメラに犯行時の映像が残されており、その解析結果などをもとに容疑者が特定された。カメラの本来の目的は犯罪防止だが、犯人検挙につながった好例といえるだろう。

◆盲点

一方、車上荒らしなどの場合、容疑者は目出し帽などを被って自らの特徴を隠すこともある。その場合、容疑者はカメラの存在を気にせず動き、カメラの犯罪抑止力は激減する。

また、窃盗などの場合、警察に捕まらない自信からか、カメラが設置されている場所でも平気で犯行に及ぶ容疑者もいる。

このため、カメラは全ての犯罪の抑止に効果があるわけではない、という。

◆過信は禁物

同課によると、カメラの設置を進めることは重要だが、それと共に普段からカメラのある道を歩くようにするなど、市民一人ひとりの防犯意識を高めることも重要だ。

また、同課は「防犯カメラは万能」という認識は誤りだとも強調。「カメラがあるから犯罪は起きないという過信は油断を招き、新たな犯罪を呼び込んで、被害者となる可能性を高めてしまう」と注意を呼びかけている。

■視点

防犯意識の見直しを

一連の取材の中で意外だったのは「防犯カメラは犯人検挙のためというよりも、防犯効果を狙い設置しているとの声が多い（つくば中央署）」ということだった。

「捜査の中で、防犯カメラのデータが犯人逮捕の決め手となることがある」。以前つくば中央署へ取材に赴いたとき、ある警察幹部に言われた経験もあり、防犯カメラは犯罪解決への「特効薬」のように感じていた。だがカメラのデータが犯罪解決につながることは多くない。

同署生活安全課の課員は、「防犯カメラに、過剰に期待することは、逆に危ない」という。特に、強盗などの犯人の多くは、「自分は捕まらないだろう」という思い込みの上で犯罪に走るため、カメラの存在などは意にも介さないという。

この課員はさらに「最終的に自分の身を守るのは自分しかいない」とも話した。

自己責任と言えばそれまでだが、大切なことは、自分の生活環境が安全だと思い込まないことだろう。

防犯カメラはあるか。日頃歩く道には街灯が多いのか。その存在に慢心していないか。自分の身の回りの環境と防犯意識を、学生一人ひとりが、今一度見直す必要がある。

（小宮山瑛生）

記者の声

ロンドン取材余話

11月、本紙取材班は筑波大学の海外留学支援事業「海外武者修行支援プログラム」の助成を受け、英国各地を回った。テーマは「ロンドン五輪・パラで、英国はどう変わったか」。メイン会場跡地など、各地を取材した。主な取材内容は本紙332号（12月5日発行）で特集したが、ここでは同テーマでは紹介しきれなかった内容を各記者の視点でまとめる。

電子化進む大学新聞
米大統領選も記事に

田中開

■英の大学新聞の最前線

1920年創刊のオックスフォード大学新聞「CHERWELL」の編集室に、前編集長のハリー・ゴースリンさんを訪ねた。同新聞は週刊。毎号約30面構成で、約2000部を発行する。部員は約60人で、政治、文化、スポーツなど各部門に分かれている。

訪問時の最新号は11月11日発行のもの。数日前に米国の次期大統領に決まったドナルド・トランプ氏についてなど、学内の問題に留まらない記事が目立った。

前編集長は「学内では常に何かが起きている。ネタには困らない」と話す一方、「（昨年6月の）ブレグジット（欧州連合からの英国脱退）が決まった国民投票」の影響から、米大統領選に注目する学生が多い。学外のネタも記事にする」。

他にも英国最古と言われるエジンバラ大の学生新聞「Student」など、複数の英国の学生新聞に連絡を取った。その中で驚いたのが、どこもデジタル版の整備が進んでいること。

全記事をウェブページで公表するほか、読者がコメントを投稿するページも。国では常識。紙媒体の良さを生かしつつ、記事の発信力と拡散力はデジタル版に任せている」（前編集長）。

ウェブページには、読者の感想や反論などが週1～2通の頻度で届くという。本紙でも、デジタル版の整備を検討する必要があると感じた。（教育学類3年）

本紙記者の取材に答える大学新聞「CHERWELL」の前編集長（右）（11月11日、オックスフォード大学構内で）＝大西美雨撮影

若者が区政に提言

平嶋健人

■「若者区長」を選出

ロンドンでは、各区の10代の若者が本来の区長とほぼ別の「若者区長」となり、若い世代の声を街の政治に生かす制度がある。

同制度を他区に先駆けて導入したロンドン南西部のルイシャム地区では、区内に住む、全ての11～18歳に選挙権を与え、若者区長を選出している。毎年10月の選挙に合わせ、30人ほどが立候補し、「学校のいじめ対策」「図書館の充実」「起業講座の開設」など公約を掲げて街頭演説を行う。選ばれた若者区長は他の若者を巻き込んで話し合いを重ね、意見がまとまれば教育委員や区長に提言。国会議員を前に演説する機会もある。

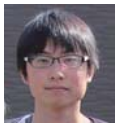
毎週行われているという定例会を覗くと、20人ほどの若者たちが性的少数者、ジェンダーの差別の問題について議論していた。同区の職員のケティ・ブラウンさんによると、定例会には誰でも参加可能で、9歳の学生でも議論に参加。同制度が「若者が政治に関心を持つきっかけになっている」（ブラウンさん）という。

制度をきっかけに、若者区長の提案を受けて同区の学校でいじめや差別について考える授業が取り入れられるなど、成果も出ている。

「街に住む以上、年齢や人種や居住歴に関わらず、まちづくりに関わる権利を持つのは当たり前。市政への関心が低いと言われる筑波大生にこそ、ブラウンさんの言葉を聞いてほしい」と感じた。（社会学類4年）

一般学生も日常的に運動

取材に応じる奥山さん（11月15日、日本スポーツ振興センターのロンドン事務所で）＝大西美雨撮影


森脇慎

■ラフバラ大から学ぶ

イギリス滞在最終日に会った筑波大生の話は興味深かった。イギリス中部のラフバラ大学でインターンシップをしていたという奥山道陽さん（体育1年）。

「ラフバラ大は筑波大に比べ、体育系以外の学生でもスポーツに関われる機会が多い」と語る。

ラフバラ大は多数の五輪メダリストを輩出しているスポーツの名門。社会科学や建築学などでも高い研究業績を上げており、奥山さんは「キャンパスが広いことも合め、筑波大と似ている」と話す。

ラフバラ大で行われるイベントのひとつに「寮対抗」のスポーツリーグがある。年間を通してさまざまなスポーツで競い合い、優勝を決める。「体育系だけでなく、全学的に楽しんでいる雰囲気があった」。

現在、筑波大で全学的に行われるイベントは年2回のスポーツデーのみ。

奥山さんは「筑波大では、日頃は体育系が学内運動施設のほとんどを使っており、その他の学生が使う機会はあまりない」と指摘した。筑波大でも、多くの学生が日常的に運動を楽しめる仕組みや機会があってもいいと考えさせられた。（社会学類4年）

反射鏡

つくば新市長への期待

11月のつくば市長選で筑波大学出身の五十嵐立青（たつお）氏（38）＝平成13年度国際総合学類卒＝が初当選した。本紙の取材に「筑波大生の声を積極的に市政に反映させる」と話した五十嵐氏。筑波大生は新しい市政に何を期待するのか、石の広場や春日エリア、医学エリアなどで聞いた。（益本健太＝人文学類1年）

【人社1年・男性】

つくばエクスプレスに、秋葉原からつくばへの直通列車の本数を増やすよう働きかけてほしい。東京からつくばに帰る際、守谷止まりの列車が多く、不便だ。

【国総4年・女性】

街灯をもっと増やしてほしい。入学当初と比べすれば増えたとは思うが、大学会館の裏などは未だ夜になると真っ暗な場所も多い。街灯が増え、夜でも安心して出歩けるようになっていけばうれしい。

【生資2年・女性】

大学周辺にもっと多くの商業施設の誘致を行ってほしい。研究学園駅やつくば駅周辺まで行かないと買えない物が多く、不便。

【人文4年・女性】

私はつくば市出身で、22年間つくば市で暮らしてきたが、これといった不満はないため特に期待していることはない。現在のつくば市の環境に満足している。

【生資2年・女性】

激しい老朽化でこぼこになっている歩道が多い。自転車に乗っている時に、転倒したこともあり、非常に危なく感じる。早急に改修工事を行ってほしい。

【生資2年・女性】

つくばエクスプレスに、路線を延伸するよう働きかけてほしい。つくば方面では筑波大付属駅まで、秋葉原方面では東京駅まで延伸されれば、筑波大生にとって利便性が格段に上がると思う。

新市長に就任した五十嵐立青さん（11月22日、つくば市役所で）＝大西美雨撮影

【図情メ1年・女性】

つくばエクスプレスに、学生割引制度を導入するよう働きかけてほしい。東京によく行くが、往復で2000円以上かかるため、学生としては経済的に厳しいものがある。

【メ創1年・男性】

昼夜問わず走り回る暴走族の対策をしてほしい。寝ている時にその騒音で起こされたことが数度あり、非常に不快だ。

【知識図書4年・女性】

つくば市ではどのような政策が行われているのか、また、つくば市長が日々どんな業務を行っているのかよく分からない。その点に関してもっと情報を公開してほしい。

【医学2年・女性】

歩行者用信号機と横断歩道を増設してほしい。自動車が多いのに歩行者用信号機や横断歩道が不足している道路があり、その道路でなかなか横断できずに困ったことがある。

【比文1年・男性】

国際都市やロボットの街を目指すといった先進的な取り組みをする前に、老朽化したインフラの改修、治安の安定化など市民生活の向上に取り組んでほしい。市民生活の充実という大前提が達成されてない状態で先進的な政策に予算を割くのは間違っている。

おすすめの一冊

『反時代的考察』第二論文「生に対する歴史の功罪」
フリードリッヒ・ニーチェ著

青年の本能が文明を救済する

河田英介（かわだえいすけ）助教（現代語・現代文化）

人文社会系・助教。コロンビア大学教養学部卒。東京大学大学院人文社会系研究科後期博士課程単位取得満期退学。2015年より現職。

私には人生の過渡期に必ず回帰する書物がある。フリードリッヒ・ニーチェの「生に対する歴史の功罪」だ。

本書との出遭いはルートヴィヒ・マクシミリアン大のインカ・ミュルダー＝バッハ教授の講義だった。教授は学生を威喝（いかつ）するかのように講義台をバンと強く叩き、「若者の本能こそ文明を救済し、真の文化創造を果たせるのだ」と実に真剣な眼差しで本書を講説した。その超越的威力に眩（くらま）された私はその後無我夢中でニーチェの著作を渉猟（しょうりょう）し、見事にニーチェ病に罹った。ニーチェ流の批判的思考が転移したおかげか、それまで寡黙な学部留学生だった私も闘達に議論し、苦だった毎週の小論文も取り憑かれたように書きはじめた。

この書が機縁となって私は研究者を目指し、青年達と修学する職業を選択したと感じて止（や）まない。だがかく云う私は、これまで本能の赴くまま実に支離滅裂な人生を歩んできた。学部では分析哲学を、修士課程では ポスト構造主義思想を、そして博士課程からは英文科に移籍し米文学を専攻した。加えて音楽活動にも熱を上げ、日本のみならず欧州各地で音楽フェスの出演やツアーを果たした。この一見支離滅裂な道程も、岐路でこの書にその都度励まされてきた私にはどれも当然の帰結だった。ニーチェ的に言えば、私は己の真の欲求を追求するため、人生の混沌を組織化せんと格闘してきただけなのだ。

バーゼル大で古典文献学の教授だったニーチェは、かの「永劫回帰」、「超人」、「アンチ・クライスト」、「力への意志」等の独自概念を次々と提起したドイツの哲学者だ。著作を通してニーチェは、歴史や科学、道徳や宗教を成立させる諸条件（真理・神・理性・権力など）を批判し、それまでの歴史主義的な価値体系を転倒することで19世紀ドイツの教養文化批判を実践した。

殊に「生に対する歴史の功罪」においてニーチェは、生を蔑（ないがしろ）にする歴史的価値体系を源泉とする似非（えせ）教養文化が、如何に歴史病を発生させ、ドイツを老耽化・弱体化・破滅化させているかを嘆いた。そして歴史病への唯一の解毒剤が「青年の本能」であり、生が担保されない限りは真の文化は創造されないと主張した。畢竟、超歴史的な青年の「霊感」こそが文化に潜む「偽りの唱導するように、己を顧みて偽りの欲求を捨て去り、付和雷同せずに真の欲求を追求しなければ、我々は自己を取り戻すところか、いずれは破滅するだろう。

それ故、どうか青年の本能こそが文明を救済すると大真面目に弁じるこの書を手に取り、筑波大の皆さんにもニーチェ病に罹っていただきたい。荒れ狂う大海原で学生諸君が力戦奮闘することを私は期待して已まない。

欲求を死滅」させ、さらに「混沌を組織化」し、歴史病に罹った19世紀ドイツを救済すると提唱したのである。

その書の結びでニーチェは、古代ギリシアが、セム系、バビロニア系、エジプト系教養文化の蔓延する破滅の危機に曝されながらも、真の欲求に立ち帰り、混沌の組織化に成功した結果、西欧文化の礎となったと唱えた。鑑みれば、最大規模のグローバリズムの渦中にある私達は、ニーチェの語るこの古代ギリシアの自己組織化から多くを学びうるはずだ。ニーチェが

NHK全国大学放送コンテスト

THKに文部科学大臣賞

「日日辞書」が受賞

第33回NHK全国大学放送コンテストの本選が、12月3日に京都アスニー（京都市中京区）で開催された。筑波大学からはTHK筑波放送協会が出場し、音声CM部門で曹乃康さん（工シス2年）と石井裕子さん（日日2年）制作の「日日辞書」が1位、森下夢子さん（日日3年）制作の「ひとこと」が2位を獲得した。「日日辞書」は、全7部門中最も優れた作品に贈られる文部科学大臣賞を受賞し、全482作品の頂点に輝いた。

同コンテストは、大学生による音声・映像作品や、朗読技術などを競うもの。映像番組部門やラジオドラマ部門など、全7部門が行われ、131団体が参加した。

音声CM部門では、「かえる」の題に沿った30秒の音声作品が募集され、46作品の応募があった。

文部科学大臣賞を受賞した「日日辞書」は、魔術師が古い言葉を現在の言葉に、現在の言葉を未来の言葉に変換する。「美しい」が「ヤバい」に変換されるなど、若者言葉が日本語として定着することを危惧した内容になっている。

石井さんは「30秒という短い時間で思いを伝えきれるよう、せりふを簡潔にするなど工夫したと話した。また、曹さんは「いわゆるネット俗語が広まり、日本語の美しさや繊細さが失われていると感じる。日本語の使い方を意識するきっかけになればと思った」と話した。（越智小夏＝比較文化学類1年、写真も）

トロフィーを持つ曹さん（左）と石井さん（12月20日、中央図書館で）

吹奏楽団

多くの演奏で魅了

筑波大学吹奏楽団の定期演奏会が、12月16日にノバホール（つくば市吾妻）で行われた。同演奏会は3部構成で全10曲が演奏され、訪れた約600人の観客は団員の息の合った演奏に耳を傾けた。

第1部ではジェームズ・バーンズ作曲「ヨークシャー・バラード」やヴァーツラフ・ネリベル作曲「二つの交響的断章」など4曲を演奏。「二つの交響的断章」の第1楽章では、静かな旋律の中に激しく情熱的な音を連ね、異質で不安げな音楽を生み出した。第2楽章では、繊細なメロディーと激烈な不協和音を絶妙に織り交ぜ、観客を魅了。目まぐるしく変化するネリベルの音楽を見事に表現した。

第2部では、ハロルド・アーレン作曲「オズの魔法使い」やサミー・フェイン作曲「不思議の国のアリス」など、有名な映画の曲を演奏した。「オズの魔法使い」では、優雅な曲調に合わせた照明の多彩な演出や、物語の世界をほうふつとさせる緑色の譜面隠しが舞台を彩り、観客を目でも楽しませた。また、曲間で「不思議の国のアリス」の白ウサギに扮した団員が司会者と掛け合うなど、曲間の演出も工夫した。

会場には、伸びやかで軽快なメロディーが響いた（12月16日、ノバホールで）

第3部では、同団の講師である鈴木竜哉氏の指揮で、フィリップ・スパーク作曲「セレブレーション」と長生淳作曲「楓葉（もみじ）の舞」を演奏した。「楓葉の舞」では、雄大な曲調の中で、微妙な和音の変化と躍動感溢れるリズムで悲しさと力強さの混在を表現し、同曲のテーマである「別れ」と「旅立ち」を観客に伝えた。壮大な響きが会場を震わせ、アンコールへと繋いだ。

アンコールは伊藤康英作曲「舞子スプリングマーチ」で、定期演奏会ではフィナーレを飾るおなじみの一曲だ。伸びやかで軽快なメロディーが会場を包み、拍手喝采で演奏会は幕を閉じた。

来場者からは、「素晴らしい演奏だった」「機会があればまた来たい」という声が上がった。

同演奏会の実行会議長である杉崎晴さん（工シス3年）は、「この演奏会で引退するので、『楓葉の舞』は思い出の一曲となった。今後も音楽を続けていきたい」と語った。（北沢佳苗＝比較文化学類1年、写真も）

アートで科学技術を体験

子どもから大人まで楽しむ

桜井さんと瀬尻さんの共同作品、転がすと音階が変わる知育楽器「コロガエル」＝桜井さん提供

コンピューター技術などを使い芸術作品を生み出す「メディアアート」を展示する「つくばメディアアートフェスティバル2016」が11月26日から12月4日までつくば美術館（つくば市吾妻）で開かれた。

同展は、メディアアートを通して一般の人が普段触れることのない科学技術を体験してもらうために2014年に開始。研究学園都市であるつくば市の特徴を生かすものとして、今回で3回目の開催となる。

筑波大学の教員や学生の製作した14作品が展示された。

桜井亮汰さん（工専3年）と瀬尻暸さん（同3年）は、転がすことで音階が変わる知育楽器「コロガエル」を共同で製作し、出品した。プログラミングとデザインという2人の得意な分野を生かした立方体の作品で、カエルがモチーフ。飛び出た目が印象的なユニークな形になっている。

カエルを前転・後転させることで、出す音の音階を上下させることができる。また、横に倒すとカエルが跳ねるような音が出るほか、音程に合わせて目の色が変化するなど、さまざまな工夫がなされている。

瀬尻さんは、「子どもが簡単に遊ぶことができる上、インテリアとしても使えるので、幅広い世代の人が楽しめる」と話した。

また、三浦教授（システム情報系）は「鉄道レール模型の幾何学」を出品。鉄道のおもちゃ「プラレール」の曲線レールを使った幾何学模様が並べられたもので、机上のレールを一筆書きでなぞる映像が天井のプロジェクターから投影されるなど、来場者の目を引いた。

訪れた人は「作品には実際に体験できるものもあり、普段触れる機会の少ない科学技術を身近に感じられた」と話した。（鈴木瑞穂＝人文学類1年、12面に関連記事）

美しい歌声で会場包む

キリスト教の世界観を表現

筑波大学混声合唱団の第41回定期演奏会が、12月11日にノバホール（つくば市吾妻）で開かれた。演奏会は4部構成で全4曲集を披露し、来場した約300人を美しい歌声で魅了した。

第1部では、司馬遼太郎のエッセイを基にした歌詞に鈴木憲夫が曲を付けた「未来への決意」など、誰もが一度は耳にしたことある名曲を歌った。この曲は伴奏のないアカペラ曲で始まり、喜びや切なさなどさまざまな感情を歌声で表現した。また、未来を切り開くような人を激励する歌詞で観客を魅了した。

第4部では、曲集「ヨハネによる福音」が歌われた。3曲からなる曲集では、世界の神秘をヨハネが告白する場面や、キリストが弟子を通じて信者に言葉を伝える場面などを表現。女声の天使を連想させる女性の高く澄んだ歌声や男性の声の力強い歌声に加え、緩急や強弱を巧妙に使った演奏で、会場は荘厳な雰囲気に包まれた。

会場を訪れた同団の卒業生は「『未来への決意』の冒頭のアカペラが奇麗だった。各パートの声量や音程のバランスがよく、心地よい演奏だった」と語った。（加藤未悠＝社会学類2年、写真も）

美しい歌声を響かせる合唱団の団員たち（12月11日、ノバホールで）

大ヒット映画の作中曲を披露

管弦楽団 プロムナードコンサート

筑波大学管弦楽団の市民向け演奏会「プロムナードコンサート」が1月14日、ノバホール（つくば市吾妻）で開催され、筑波大学生ら約220人が来場した。

コンサートは、普段オーケストラになじみのない市民に親しみを持ってもらおうと、毎年開催している。曲目はアンサンブルや序曲、ポップスなど、通常のコンサートよりも演奏時間が短いものが多い。

今年は2部構成。第1部では、金管・木管・弦楽器がアンサンブル楽曲を演奏。ある観客は「一つひとつの楽器の音が分かり、重層的なオーケストラとは違う楽しみ方ができた」と話していた。

特に会場が盛り上がったのは、第2部の最後に演奏された、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン 呪われた海賊たち』の作中曲を集めたメドレーだ。

同映画は2003年に公開。18世紀のカリブ海を舞台に、海賊ジャック・スパロウが金貨の謎に挑む冒険物語だ。メドレーは代表曲である「He/s a Pirate」（彼こそが海賊）など6曲で構成される。

演奏では、リズミカルで勇ましい曲を力強く表現。迫力に溢れ一体感のある演奏に、客席からは大きな拍手がわき上がった。

団長の井上桃伽さん（工シス2年）は「有名な映画の作中曲を選ぶなど、市民の皆さんが親しめるよう工夫した。コンサートの運営は初めてだったが、成功して良かった」と話した。来場した男子学生は「パイレーツ・オブ・カリビアンが印象的だった。シンバルの大きな音に、荒れ狂う波の中進む船を連想した」と話した。（越智小夏）

ぶらり俳句 筑波大

枯木

・聡さうな青空のある枯木かな
・まひるまへ空低うなる枯木かな
・涼しさに似て裸木の明るさよ

撮影地＝松美池前

葉を茂らせ、花をつける木が美しいことは言うまでもないが、葉を落としきった枯木にはっときせられることもある。たとえば天気のよい月には露わになった枝々が空に映える。

ちなみに「枯木」と言っても枯死しているのではない。寒々とした姿がまるで枯れているようだと見立てた古典的な言い回しである。「裸木」という言い方もある。（堀下翔＝比較文化学類3年、写真も）

退職を前に 振り返る教員人生

医学から芸術まで多種多様な分野の教員が揃う筑波大学。今年もその中から多くの教員が定年退職を迎える。研究、教育だけでなく、社会貢献など多方面で活躍した教員たちは、筑波大で何を考え、どのように過ごしたのか、退職の日を前に、印象深かったエピソード、学問の道に進むこととなったきっかけ、今後の展望などを聞いた。（佐々木悠里、益本健太＝人文学類、山本颯＝比較文化学類、石川泰行、岡田優太＝社会学類、吉永真理＝生物学類）

絵を描くことは生きがい

藤田 志朗 教授（芸術系）

月や花といった自然の風物と、朽ちた歯車などの人工物が共存する荒涼とした空間を描き、物寂しい心象を表現する独創的な作品を生みだしてきた日本画家。先進的な作品が多いことで知られる日本画の公募展「創画展」での数多くの受賞歴を持つ。

京都で扇子の絵付けをする家に生まれた。幼少期から絵師たちを見て育ち、遊びで絵を描くことも多かった。「どんな絵を描いたかは覚えていないが、当時の遊びの感覚が自分の原点になっていると感じる」と話す。

本格的に日本画を描き始めたのは、美術系の高校に進学してから。日本画では、顔料に鉱石を砕いて作る岩絵具と、顔料を定着させる糊に動物の皮革などから作る膠を使う。「日本の風土に合った自然の材料を使う日本画の土着性に魅かれた。

高校卒業後、4年間の浪人生活を経て、京都を離れ東京藝術大学に進学。大学院にも進み、卒業後は同大学の研究助手を務めた。副業で絵画教室の講師やアクセサリーの絵付けをして生計を立てる日々が続いたが、故・西村昭二郎教授から誘われ、筑波大の教員に。「大学教員になることは一切考えていなかったが、断る理由もなく引き受けた」という。

最も印象深い自分の作品は2006年の第33回創画展で、最優秀の創画会賞を受賞した「夜航海」。都市から遠く離れた月夜の荒野に、機械や歯車など産業廃棄物が山積みで捨てられている様子を描いた作品で、受賞を機に創画会員に選ばれた。「筑波大の至る所に捨てられたパソコンなどの廃棄物から着想を得た」という。

創画展は講評がなく、落選しても理由が分からない。自分の作品の欠点を自分で探し、改善する作業は辛かったが、「その分、受賞と創画会員への選出の知らせを受けた時は感慨深かった。

絵を描く際、何か目的や意図を持って描くことはほとんど無い。「絵を見て何を感じるのかは、見る人次第。その解釈を尊重するには、自分の解釈を押しつけない方がいい」という。見る人が自由に解釈できる絵を描くことが、創作を続ける動機になった。「目的や意図に縛られず絵を描いている時間が、自分の生きている時間。

創作活動の外にも、湯島聖堂（東京都文京区）の構内に展示された孔子の乾漆像の復元にも彩色班として参加。孔子を描いた絵画作品を、剥げ落ちた彩色や模様を再現しつつ模写し、孔子像復元の参考資料とした。

また学生との交流も欠かさなかった。研究室の学生と野球やボーリングをしたり、時には喫茶店で相談に乗った。卒業した学生にも、展覧会での出品依頼をするなど、教え子とも親密だ。「学生から刺激を受けることも多かったし、何より学生と関わることが楽しかった」とほほ笑む。

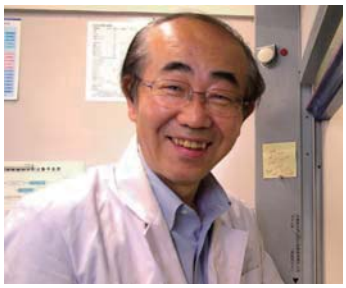
退職後は「若い日本画家の育成に尽力したい」と話す一方、「定年は迎えたが、絵描きとしてはまだ折り返し地点。今後も描き続けていきたい」と話した。

第 33 回創画会賞を受賞した「夜航海」＝藤田志朗教授提供

自然と人工物が共存した空間描く

ケイ素三重結合に成功

関口 章 教授（数物系）



地球の大気の元素は窒素、酸素の順で多く構成されているが、地殻に含まれる元素では酸素に次いでケイ素の割合が高い。ケイ素の研究は、ここ40～50年ほどで大きく進み、半導体や太陽電池などの実用化に不可欠なものとして私たちの生活を豊かにしてきた。

それまで不可能とされていたケイ素の三重結合を世界で初めて合成したケイ素研究の第一人者。

今でこそ研究の最前線で活躍するが、高校卒業までは化学の勉強にそれほど魅力を感じていなかったという。ケイ素の研究に大学後研究室の石田俊彦名誉教授らに教わり、研究者の道を志すようになった。

「日常の生活で意識することがあまりない元素の研究は、実は私たちの生活を一変させる可能性に満ちている」という化学の楽しさを

その後1976年に筑波大学院に進学し、安藤亘名誉教授の研究室でケイ素化学の研究を本格的に開始した。78年からは教員になり、当時研究が進んでいなかったケイ素の多重結合の可能性に着目した。

81年、米科学者のロバート・ウェスト教授がそれまで不可能と思われていたケイ素原子を三重結合させることに成功。化学界の常識を覆し、さまざまな物質の合成の可能性を大きく広げた。この研究成果に感化され、85年には渡米。ウェスト教授の研究室の門を叩いた。

そこでの研究をもとに「ケイ素三重結合等価体という論文を86年に発表。化学反応の途中で三重結合ができていたのではないかという研究成果は、世界中のケイ素化学者から注目を集めた。

帰国後、87年に東北大学櫻井英樹名誉教授の研究室で助教授を歴任し、96年に筑波大の教授に着任。ケイ素の研究を続け、2003年にはついにケイ素の三重結合の合成に成功した。長年の研究で培った「不安定な化合物を扱う」化学合成技術を駆使して、誰も成し遂げられなかった未知なる電池に比べ、充電速度や安全性に優れる「ケイ素電池」の実用化を目指すという。「これからも挑戦していきたい」。

外気と遮断された空間で薬品を取り扱える装置などを使って実験を行う＝岡田優太撮影

周囲の人が支えに

心臓病の研究に尽力

青沼 和隆 教授（医学医療系）

心臓血管病の中でも、特に突然死や脳梗塞の原因となる不整脈の治療法の確立に尽力してきた。不整脈の専門医として、細い管を心臓の血管に通して患部を治療するカテーテル手術を得意とする。

高校時代から数学や物理が得意だった。大学では血液循環の仕組みの中で最も重要な心臓の働きについて学び、不整脈の専門医となり、5000件以上の不整脈の手術を行ってきた。

医師生活の中で、忘れられない経験がある。

大学卒業後の研修医時代、最初に受け持った白血病の患者が一時、脳幹出血により危篤状態になった。回復が絶望視される中、諦めずに献身的な治療を続け、患者は奇跡的に回復。退院の際、患者本人から言われた「ありがとう。先生のおかげで生きて帰れます」との言葉が、今でも耳に残っている。以降、「どんなに厳しい状況下でも、全力を尽くす」。臨床に命を捧げてきた。

不整脈の治療法探る

「カテーテル」という2～3程の手術機器を太もものの血管から体内に入れ、血管の中を通って機器を運び、患部を治療する技術を用いた手術を多く手がけた。命を救うことのみを考えてきた中で、大学教員となる契機になったのは50歳を過ぎたころ。「自分が得た知識や技術を若い世代に伝えたい。多忙な病院勤めでは出来ない実験など基礎的な研究を主にしたい」と思い、2004年から筑波大学で講師として働き始めた。一方、筑波大学附属病院循環器内科でも臨床医を続け、カテーテル治療を推進した。

教員となってからは「バルーンカテーテル」という、不整脈に対する新たな手術法の研究と開発を主導。従来は、管の先端に付けた2～3程のカテーテル先端の機器を使って患部を治療するが、ペン先に縮小と膨張が可能なバルーンを付けて治療する。従来に比べて1度に広範囲の治療が行えるようになり、治療時間も短く済むようになった。

退職後も数年間は、特任教授として筑波大の教壇に立つ。「65歳はまだまだ活躍できる年齢。退職後も、今以上に社会に貢献したい」と語った。

スト教授の三重結合の合成から23年後のクリスマスの夜だった。「サンタさんからの贈り物だったのかもね」とほほ笑む。著名な米科学誌サイエンスに取り上げられたほか、数多くの学術賞を受賞。14年には永年の教育・研究功績が認められ、紫綬褒章の名誉を受けた。

研究を振り返り、「恩師や学生など、周囲の人たちにいつも支えられてきた」と振り返る。学生も教員も同じ研究者。学生からも学ぶ姿勢を大切にしてきた。

退職後は別の研究機関でケイ素などの研究を続ける。スマホなどに使われる

旅立つアスリート

スポーツの強豪として、今年度も輝かしい成績を残している筑波大学。多くのトップアスリートが筑波大を旅立っていく。その中でも特に輝く4人の4年間の軌跡、今後の進路を紹介する。（佐々木悠里、益本健太＝人文学類、越智小夏＝比較文化学類、橋野朝奈＝日本語・日本文化学類、石川泰行、前名裕一＝社会学類）

■バスケ 生原秀将（しょうげん）（体専4年）

卓越したリーダーシップとバスケットボールに対するひたむきな姿勢で、主将としてチームを引っ張った。ポジションはチームの司令塔であるポイントガード。

3年生からスタートメンバーに定着し、馬場雄大（体専3年）や杉浦佑成（同3年）ら、高い能力を持つ選手が揃うチームをまとめあげ、全日本インカレ2連覇に貢献した。

4年生になると主将に就任した。勝って当たり前の年と言われ、大きなプレッシャーがある中でも主将として存在感を発揮。筑波大初の主要3大会での優勝、インカレ3連覇を達成した。また、同年には男子ユニバーシアード日本代表に選出された。

1月からは、プロリーグであるBリーグ一部のリンク栃木ブレックスに特別指定選手として所属する。「Bリーグの環境にしっかり対応し、自分らしくプレーしたい」と意気込む。

■ラグビー 忽那（くつな）健太（体専4年）

中学時代には愛媛県選抜で主将を務め、高校では全国大会常連の強豪、島根県石見智翠館（いわみちすいかん）高校の主将としてチームを全国選抜準優勝に導くなど、実績十分の実力派選手。ポジションはスタンドオフ、センターやフルバックをこなす。

大学入学後も関東大学ジュニア選手権に出場するなど活躍を見せた。その後日本代表の福岡堅樹（平成27年度情報科学類卒）らの学年が引退すると主将に就任し、よく通る声とリーダーシップでチームを先導することだという。

「最後の一年間は後悔も多かったが特に充実していた。情熱を持って取り組めば道は開けるということがわかった」と語る。卒業後はトップリーグのホンダヒートへの所属が内定している。今後の目標は、1年目から試合に出場することと、そして早く一人前になれるように仕事も両立することだという。

■バレー 髙橋健太郎（体専4年）

身長201㌢という恵まれた体格を持ち、力強いスパイクと高さを生かしたブロックで日本代表としても活躍する。

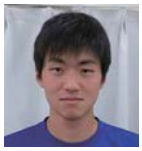
ポジションは、速攻やブロックの要であるミドルブロッカーだが、攻撃に専念するオポジットを務めることもある。

高校からバレーを始めたということもあり、技術面では発展途上ながら、潜在能力の高さは折り紙付き。筑波大でも主力として活躍した。「良い指導者や仲間に恵まれ、非常に大きな財産となった」と話した。

2014年には日本代表に初選出。15年には、東京五輪で主力となりうる有望選手4人のユニット「NEXT4」に、中央大の石川祐希らとともに選ばれた。次世代の日本代表のエースとして期待される。

卒業後は、Vリーグの東レアローズへの所属が内定している。今後について、「筑波大で頑張ってきたことを誇りに、新たなステージでも活躍したい」と話す。

■陸上 山下航平（体専4年）



専門は三段跳び。スピードのある助走からの伸びのある跳躍を武器に、昨年リオ五輪への出場を果たす。

同種目の日本記録保持者で五輪出場経験もある父の影響で、高校から三段跳びを始めた。3年生の時には国体で優勝するなど活躍。筑波大に進学後、伸び悩んだ時期もあったが、4年生になり飛躍を遂げた。5月の関東学生対校選手権では自己ベストを約80㌢上回る16㍍85で優勝。五輪参加標準記録に到達し、リオ五輪代表に追加選出された。

リオ五輪では結果が振るわず、予選落ちに終わったが、4年後の東京五輪では活躍が期待される。

■野球 汐月祐太郎（社学4年）

身長173㌢と小柄ながら3年生春からレギュラーとして勝利に貢献。

ポジションは外野手。本塁打よりも安打を重視する打撃が特徴で、試合では主に先頭や3番、5番などを任された。3年生秋にはその打撃が評価され大会の最優秀選手である「ベストナイン」に選ばれた。「うまくいかないことが多くて苦しかったが、隣にはチームの仲間がいてくれて、振り返れば充実した4年間だった」と振り返る。

卒業後は三菱重工広島で野球を続ける。「とにかく勝ちにこだわって頂点を目指したい」と意気込む。

HELLO! 先端科学

歩く感覚を脳に伝える

脳卒中のリハビリにHAL

鶴嶋英夫准教授

脳卒中の患者数は、全国で年間約100万人を超え、寝たきりになる原因の第1位でもある。このような現状の中、脳卒中が原因で起きる歩行障害のリハビリ治療に、下肢装着型ロボット「HAL」＝㊟1＝の単脚モデルを用いた臨床研究が鶴嶋英夫准教授（医学医療系）のもとで進められている。

脳卒中は、脳梗塞や脳内出血といった脳の血管に異常が起きる病気の総称。発症時に右または左半身にまひ症状が残る片まひと呼ばれる状態になり、後遺症として残る場合がある。片まひを起こした際にはまひを起こした側の手足も同時にまひするため、歩行障害が起きる。

片まひ状態の患者は、まひのある側の足の筋力が低下し、関節を保持したり、関節を曲げることも困難になるため、まひした側の足を引きずるように歩行する。このような病態に対して現状の医療ではリハビリを行って、歩行練習をしている。

この歩行練習である程度は歩行能力が改善するが、既存のリハビリにも限界があり後遺症として歩行障害が残ることも多いという現実があった。

そこで鶴嶋准教授は、体を動かそうとする際に体内に流れる電気信号を読み取り運動機能を回復させるロボットスーツ、HALに着目。HALをリハビリに導入した臨床試験を昨年11月から始めた。

試験では、HALを装着した状態でのリハビリと通常のリハビリを比較。HALをまひがある足に取り付けることで内蔵されたセンサーとモーターで歩行を助ける。

また、歩く感覚も脳に伝わるため、通常のリハビリよりも歩行改善の効果があるという。

HAL装着のリハビリを導入することで、まひ後の歩行障害に悩まされていた脳卒中の患者が社会復帰を目指すことも可能になるという。

すでに、これまでの臨床試験で、通常のリハビリでは屋内歩行がやっとだった患者が、起伏のある屋外での歩行も容易になるまでに回復した例が挙がっている。

臨床試験が成功し、医療機器承認が得られれば、脳卒中後の歩行障害の新たな治療法が確立すると思われる。医療用のHALは難病に指定されている筋萎縮性側索硬化症（ALS）や筋ジストロフィーなど8つの病気の治療で両脚モデルが既に使われている。

HALが社会復帰を目指す脳卒中患者に希望の光を照らす日もそう遠くない。

（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類2年）

㊟1 HAL＝世界初の、体内に流れる電気信号を読み取って動くロボットスーツ。脳・神経・筋系の疾患患者の機能改善・再生医療や、介護現場での作業支援などを行う。筑波大発の企業「サイバーダイン社」が、世界的に事業展開を行っている。

交換学生からの手紙

人間は実は無駄なもの好き 役立つ「ヘンなもの」作る

明和電機 代表取締役社長 土佐 信道さん

筑波大学芸術研究科の大学院を修了して、24年目になる。大学時代にナンセンスマシーン」という、まったく役に立たない機械を作りはじめ、そのアートを思いついた。気が付けば今日までずっとそれを続けている。普通に考えれば、「人の役に立たないもの」は売れない。だとすれば、明和電機はとっくに倒産しているはずである。しかし、いまだに元気に活動を続けている。なぜか？

存続できる理由があるとすれば、人間は実は「無駄なものが好き」ということだろう。無駄なものを作り続けていく、小銭も集まって会社存続の資金となる。最近ではソーシャルメディアの発達により、世界中の「モノ好きな方」にも明和電機の情報が届くようになった。

本心を言えば、僕は「人の役に立たないもの」を作っているつもりはまったくない。人類のこと、文明社会のこと、そして自分という存在について真面目に考え、そこで浮かび上がる問題点の答えとして製品を作っている。人類にとって必要な「測定器」みたいなものを作っているつもりだが……できたものは、何だかよく分からない「ナンセンスマシーン」になってしまう。製品のデモンストレーションをすると、みなさんケラケラと笑っている。

芸術家というのは、大昔からそういう存在なのかもしれない。もし僕が原始時代に生きていたとしても、マンモスは獲らず、その辺の木の枝を組み合わせて「ヘンなもの」を作っていただろう。そして、仲間にそれを見せることで「おまえ、変なもの作ってるな。ちょっとこのマンモスの肉と交換しない？」と生き残る糧をもらっていただろう。心の中で「この〝ヘンなもの〟のほうが、〝武器〟よりも、世界にたくさんありますように」と夢みながら。

（平成4年度芸術研究科デザイン専攻総合造形分野修士課程修了）

1920年の創刊以来、東京大学の「今」を発信し続ける

東京大学新聞

【新　聞】
最新の学術動向から身近な学内トピックスまで、日々東京大学から発信される旬なニュースを週刊でお届け。通常号のほか就職、大学院、受験、資格、入試等、テーマ別の特集号も含め年間42回発行

【出　版】
東京大学情報本『東大2017　とんがる東大』1,620円(税込) 好評発売中!
東京大学新聞年鑑『東大は主張する2015－16』1,620円(税込) 好評発売中!

© 東京大学新聞社 2017

定期購読のお申込は、下記の電話番号もしくはメールアドレスまでご連絡ください。
■購読料金（送料・税込）1年間…7,300円／2年間…14,200円

公益財団法人 東京大学新聞社 〒113-8691 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内 電話 03(3811)3506 E-mail post@utnp.org
ウェブサイト http://www.todaishimbun.org/company オンライン版 http://www.todaishimbun.org/

女子 準優勝に終わる

高さ生かせず鹿屋体育大に完敗

全日本インカレ

コンビネーション攻撃をしかける塚田（左）と甲（右）（昨年12月4日、鹿屋体育大戦で）

バレー

【大田区総合体育館（東京都大田区）で佐藤巧基＝物理学類1年、写真も】大学日本一を決める全日本大学選手権大会（全日本インカレ）が11月28日―12月4日に開かれ、筑波大女子は準優勝に終わった。敢闘賞に土井さら（体専4年）、サーブ賞に丸尾遥香（同2年）、スパイク賞に甲萌香（同1年）が選ばれた。

12月4日の決勝戦では、一昨年の全日本インカレの3回戦でフルセットの末惜敗した鹿屋体育大と再び対戦。因縁の相手に筑波大は持ち味の高さを生かせず0―3で敗れた。

第1セットは「緊張していて思い通りのプレーができなかった（土井）。序盤から相手に連続得点を許し、厳しい状況に。サーブレシーブが乱れセッター！塚田しおり（同4年）への返球が上手くいかない場面が目立った。そのまま序盤の悪い流れを立て直すことができず、13―25でセットを奪われた。

第2セットは中盤の5連続得点などで勢いづいたかに見えた。だが、その後、相手に大量連続得点を奪われ、21―25でこのセットを落とした。

第3セットは中盤に4連続得点を許し、鹿屋体育大の流れに。筑波大は後半ピンチサーバーとして湯浅暁子（同2年）を投入し粘りを見せるも、相手に逃げ切られ20―25で優勝を逃した。

主将の土井は「あと一歩のところで日本一に届かなくて悔しい。決勝戦という舞台で緊張して自分達の力が出し切れなかった」と悔やんだ。

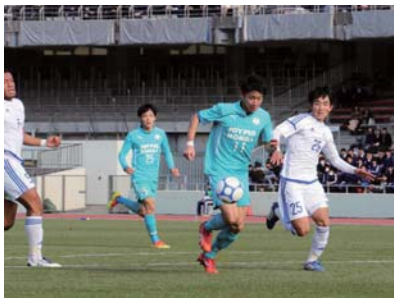
中西康己監督（体育系・准教授）は「スパイクレシーブが上手くいかずこちらの攻撃が中途半端になってしまった。相手の攻撃をブロックしてワンタッチを取って攻め返すプレーをしたかったが、上手くいかなかった」と話した。

全日本大学選手権

13年ぶりに制覇

サッカー

【浦和駒場スタジアム（さいたま市浦和区）で小宮山瑛生＝社会学類2年、写真も】大学サッカー日本一を決める第65回全日本大学選手権（インカレ）の決勝が12月18日に行われ、筑波大は日本体育大を8―0で破り優勝した。また、最優秀選手に中野誠也（体専3年）が選ばれた。



日体大の選手から抜け出しボールをキープする中野（12月18日、日本体育大戦で）

13年ぶりのインカレ制覇を目指した筑波大は準決勝までに10得点1失点と安定した戦いぶりを見せていた。決勝の相手、日本体育大は今年度の関東1部リーグを戦ったチーム。筑波大は順位こそ上位なものの、今季のリーグ戦での対戦成績は1敗1分けと勝ちきれない試合が続いていた。

序盤に流れをつかんだのは日本体育大だった。11分、筑波大はパスを繋ごうとするも奪われ、ミドルシュートを打たれた。シュートはクロスバーに当たりゴールとはならなかったが、筑波大側に嫌な雰囲気が漂った。悪い空気を断ち切ったのは大会ベストMFを獲得した西澤健太（同2年）だった。28分、相手陣内で北川柊斗（同3年）がボールを奪うと西澤へパスを通し、西澤はボールをキープしミドルシュート。ボールはゴールに吸い込まれた。先制点で試合の流れを引き寄せた。

その後、西澤が追加点を決め勢いに乗る筑波大は、前半アディショナルタイムに、会津雄生（同2年）からのロングボールを受けたエースの中野が相手を振り切り相手キーパーと一対一の場面でゴールを決め、3―0で前半を終えた。

後半に入っても筑波大の勢いは衰えなかった。8分、前線へのロングボールを中野が相手の裏に抜け出して受けると、落ち着いてゴール左隅に流し込み、2点目を決めた。筑波大はこの後、北川がゴールを量産。16分には相手の裏に抜け出しキーパーと一対一の場面でゴールを決めた。25分には、左サイドで細かくパスをつなぎ、相手陣内へと侵入すると北川へとボールをつなぐ。ボールを受けた北川はドリブルで相手を3人かわしてペナルティーエリアを突破し、左足でシュート、ゴールネットを揺らした。北川はさらに35分にもゴールを決め、ハットリックを達成。そして44分のシュートで中野もハットリックを達成し、8―0の大勝を収めた。

小井土正亮監督（体育系・助教）は「選手自身がチームの勝利のためにプレーしていた。大量得点できたことはもちろん、無失点で終えたことも良かった」と振り返った。

圧倒的な強さで得点を量産し、日本体育大に付け入る隙を与えなかった（12月18日、日本体育大戦で）

圧巻のゴールラッシュ

帝京大に惜敗

9年ぶりに全国逃す

関東学生対抗戦

ラグビー

【秩父宮ラグビー場（東京都港区）で山野辺拓実＝社会学類3年、12面に関連写真】9月11日から12月4日まで関東大学対抗戦が行われた。筑波大は12月3日に行われた帝京大戦での敗北により、チームはAグループ（第一部）の8校中5位という結果となり、惜しくも上位4校が進める全国大学選手権への切符を逃した。対抗戦で敗退するのは、9年ぶり。

3日の帝京大戦では、24―29で敗れたものの大学選手権7連覇中の帝京大に引けを取らないプレーを見せた。

前半は開始直後からボールを相手陣地で保持し続けた。29分に反則で得たチャンスから押し込み、占部航典（体専3年）がトライし、先制した。35分に点を奪われるも、38分にディフェンスラインを抜けたボールを杉山優平（同1年）が つなぎ、鈴木啓太（同3年）がゴールラインを駆け抜けた。しかし、その後、帝京大の反撃を許し、12―14で折り返した。

後半も攻守の入れ替えが何度も起こった。5分にペナルティーゴール、8分にトライを決められるものの、12分にゴール前のスクラムで押しきり、高屋直生（同3年）がトライした。直後に相手の反則でボールを獲得するも、チャンスを活かしきれない。逆に帝京大の猛攻を止められず24分にトライを許した。しかし選手は最後まで攻撃の手を緩めず、41分に瀬尾優大（同3年）がゴール前のぶつかり合いから抜け出しトライ。だが一歩及ばず24―29で試合終了となった。

試合後、主将の忽那健太（同4年）は「敗北したことで公式戦最後の試合になってしまいとても悔しい。しかし筑波大に4年間いられて良かった」と話した。

古川拓生監督（体育系・准教授）は、「試合前、これまで積み上げてきた実力を出し切るよう伝えた。帝京大を相手に一歩も引かなかった選手たちの成長ぶりを褒めたい」と話した。

帝京大の選手のタックルに果敢に挑む主将の忽那（12月3日、帝京大戦で）＝岡田優太撮影

ダブルス優勝

シングルでもベスト4

全日本学生室内選手権

テニス

全日本学生室内選手権（室内インカレ）が11月27日から12月4日にかけて江坂テニスセンター（大阪府吹田市）で開催され、女子ダブルスで米原実令（体専3年）、森崎可南子（同2年）ペアが優勝し、女子シングルでは牛島里咲（同2年）がベスト4となった。

女子ダブルスでは、12月2日に行われた準決勝で米原・森崎ペアが早稲田大の金井綾香・大矢希ペアに第1セット、第2セット共に6―4のストレート勝ちで、決勝に進出。3日の決勝では大会の第1シードであり、昨年8月の全日本学生選手権と10月の全日本大学対抗王座決定試合で敗れている細沼千紗子上唯希（早稲田大）ペアと対戦。試合は立ち上がりから攻撃的なプレーを続け、森崎が繰り出すフォアハンドのショットなどが決まり、第1セットは6―4で勝利し、続く第2セットも6―2で下し、優勝を飾った。

女子シングルに出場した牛島は苦手な室内コートに加え球速が早くなるハードコートという不得意な条件の中、第9シードで臨んだ。2日の準々決勝では江崎子（早稲田大）を相手に第1セットを8―6とタイブレークになりながらも競り勝ち、続く第2セットは6―3と持ち直しこの試合をなんとか制した。しかし、翌日の準決勝ではハードコートを得意とする第2シードの上唯希（早稲田大）と対戦。ミスショットが目立ち終始、相手のペースのまま第1セット、第2セットともに1―6と完敗し、この大会をベスト4で終えた。

三橋大輔監督（体育系・准教授）は「牛島にとって苦手とする条件の中での試合で本人も準備はしてきたと思うが、相手の牛島への対策がよく練られていた」と試合を振り返った。

（岡田優太）

喜びを合う森崎（左）と米原（12月3日、早稲田大戦で）テニス部提供

1・2回戦敗退

全日本総合選手権

バドミントン

バドミントンの日本一を決める全日本総合選手権大会が昨年11月28日から12月4日に国立代々木競技場第二体育館（東京都渋谷区）で開催された。大久保敦美（体専4年）、加藤美幸（同3年）、柏原みき（同3年）、馬場湧生（同3年）の計4名が本選に出場したが、シングルス、ダブルス、ミックスダブルスともに1回戦、2回戦敗退など厳しい結果に終わった。

30日に行われた女子シングルス1回戦で大久保は三谷美菜津（NTT東日本）と対戦し、0―2で完敗した。実業団との対戦は「球の質も大学生とは異なり難しかった（大久保）」。

また、同日行われた女子ダブルス1回戦の法政大の宮浦玲奈・勝保莉里香ペアとの対戦では加藤・柏原ペアが出場し2―0でストレートで勝利したものの、翌日の2回戦では川島里羅・尾﨑沙織ペア（NTT東日本）に1―2で敗北した。加藤、柏原は「次の総合選手権ではベスト8入りを果たしたい」と話した。

（吉永真理＝生物学類1年）

男子５連覇　女子総合で１・２位

堀口悲願の初優勝

【つくばカピオ（つくば市竹園）で徳永翼＝日本語・日本文化学類2年、写真も】全日本ラート競技選手権大会が12月10―11日に行われた。筑波大からは6名が決勝に進出したほか、卒業生も多く出場した。男子総合では高橋靖彦（平成24年度体育修了）が5連覇を成し遂げ、女子総合では堀口文（平成27年度体育修了）が初優勝した。また、5連覇のかかった松浦佑希（体育2年）は僅差で2位に終わった。

直転で華麗な演技を決める松浦（12月3日、全日本ラート選手権で）

体操

■女子

大会は直転・斜転・跳躍の3種目を行い、すべての合計得点で総合優勝を決める。

女子総合は、5連覇のかかった松浦が斜転・跳躍ともに1位通過しており、堀口や吉行暢子（平成24年度体育専門学群卒）らが後を追う形となっていた。

直転では先に演技をした松浦が、予定していた高い難度の演技が抜けてしまったことで調子を崩し、思うように点数が伸びず種目で4位に。最終演技者の堀口は雄大でなめらかな演技を披露。膝かけ2回回りや背面支持前回りなど高難度の技も全て成功させ、10・65点を獲得し、逆転優勝を果たした。

堀口は「ずっと2位だったので優勝できてよかった。今まで本番で100％の演技ができなかったが、今回の演技は大成功だった」と語った。

■男子

男子総合は、高橋が江塚和哉（ありのみ保育園）に直転で点数を抜かれたため昨年に続いての完全優勝は果たせなかったものの、3競技すべてで10点台の高得点を記録。31・30点で2位と5点以上の差をつけ優勝した。高橋は「直転の調整不足などもあったがやり切った。次は4月の世界チームカップでの連覇を目指して頑張りたい」と話した。

本谷聡監督（体育系・講師）は「演技全て高いパフォーマンスを見せたが、2回試技のある跳躍で1回しか成功しなかったなど課題は残る。技の難度などでなく、いかに人を惹きつけられる演技ができるかが勝負になっていくだろう」と話した。

松浦 僅差で2位に

男女ともに3回戦敗退

プロチーム相手に善戦

全日本選手権

バスケットボール日本一を決める全日本選手権が、1月2―9日に国立代々木競技場第1体育館（東京都渋谷区）などで行われた。筑波大は男女ともに出場し、プロチーム相手に善戦するも、ともに3回戦で敗退した。（益本健太）

ディフェンスを避けながら果敢にシュートを狙う杉浦（1月5日、アルバルク東京戦で）＝JBA提供

バスケ

■男子

4日の2回戦で早稲田大に99―72で快勝した筑波大。5日に国立代々木競技場第1体育館で行われた3回戦で、プロリーグのBリーグ1部で東地区1位（1月19日現在）のアルバルク東京と接戦を繰り広げたが、74―86で惜しくも敗れた。

第1ピリオド、筑波大は満田丈太郎（体専4年）のシュートで先制。その後は競り合った展開となったが、第2ピリオドに4連続得点を許し、32―37で前半を終えた。第3ピリオド、筑波大は杉浦佑成（同3年）の得点を皮切りに反撃ののろしを上げ、馬場雄大（同3年）の速攻でのダンクシュート、主将の生原秀将（同4年）の巧みなジャンプシュートなどで一時は1点差まで追い上げた。しかし、地力に勝る相手に一歩及ばず74―86で敗北。生原は「プロチームを倒すために1年間練習に取り組んできたのでとても悔しい」と話した。

吉田健司監督（体育系・准教授）は「来年こそはプロチームに勝利したい」と語った。

■女子

3日の2回戦でトップリーグWJBL9位（1月19日現在）の羽田ヴィッキーズを62―54で破り、勢いに乗っていた筑波大。4日に駒沢オリンピック公園総合運動場体育館（東京都世田谷区）で行われた3回戦では、WJBL10位（1月19日現在）のアイシン・エィ・ダブリュ・ウィングスに62―90で敗れた。

序盤、筑波大は相手の堅いディフェンスを前に得点を重ねられなかったが、積極的なリバウンドから好機を作り出し、一時はリードを奪った。しかし、ミスをきっかけに大量失点し、第2ピリオドでは最大18点のリードを許した。その後は松本愛美（体専3年）の3Pシュートなどで26―38と12点差まで追いつき、前半を折り返した。後半に入ると、鈴木玲美（同4年）の得点などで反撃するも、高さで上回る相手に着実に得点を決められ、62―90で完敗した。主将の渡邊愛加（同4年）は「目標のベスト8には届かなかったが、苦しい時間帯もチーム一丸となって戦えてよかった」と話した。

大高敏弘監督（体育系・教授）は「プロチームに対して前半は善戦でき満足している」と語った。

ベスト32に終わる

関東学生新人戦　時間許さず敗北

積極的にメンを狙っていく田内（12月11日、中央大戦で）＝小宮山瑛生撮影

剣道

【東京武道館（東京都足立区）で山本颯＝比較文化学類1年】第62回関東学生新人戦が12月11日に行われ、筑波大はベスト32となった。

4回戦で対戦した中央大は昨年10月に行われた第64回全日本学生優勝大会で準優勝した強豪。先鋒の松井真之介（体専1年）は相手から立て続けに2本を取られ、次鋒の加納誠也（同1年）も上段の相手のスピードに翻弄され素早くメンを取られ時間切れで一本負けとなった。だが、五将の佐藤祐太（同1年）は慎重に試合を進めて相手の隙をついてメンを取り、そのまま一本勝ちを収めた。続く中堅の甕健介（同2年）は試合開始すぐにメンを取ったが、反則2回で相手に一本を与えてしまい引き分けとなり、三将の初田彪（同2年）も続いて引き分けに終わった。だが、副将の田内雄大（同2年）が開始直後から果敢に技を繰り出して主導権を握りメンを先取、さらに相手がメンに来たところを出コテで仕留め二本勝ちを収めた。これで勝敗と取得本数が同数となった大将の多賀公基（同2年）は、冷静に相手の隙を伺っていたが、メンに飛んだ瞬間を狙われメンを取られた。その後、猛攻を仕掛け、一本を取り返しに行くも時間切れで敗北した。

今回の結果を受け、鍋山隆弘監督（体育系・准教授）は、「多くの弱点、課題を発見できたことは良かった。今後の稽古では前に出ようとする意識を付けさせたい」と語った。

仲間と切磋琢磨し成長

ハンドボール日本代表　河原畑祐子（体専２年）

6月25日の日韓定期戦の日本代表に選出。試合では後半中盤に途中出場した。絶妙な角度を狙うシュートが持ち味で、将来を期待される次世代のエースだ。

東京都出身。幼少期はスポーツに縁がないピアノ少女だったが、小学4年生の時、友達に誘われて近所のハンドボールクラブに入部。当時のポジションはキーパーで、「打ち込んでくるシュートを止めるのに夢中になった」。まだ、クラブで共にプレーすることで絆を深めた3人の仲間ができた。小学校卒業と同時にクラブからも離れたが、「この仲間で中学校でもハンドボールを続けたい」。その思いを胸にそろって地元のハンドボール強豪校・東久留米市立西中に進学。U―16日本代表も兼任する監督の指導のもと、ハンドボールに本格的に取り組み始めた。新たな仲間も加わった5人で高みを目指した。

この頃からポジションは得点力や多彩な個人技が求められるエースポジション・レフトバックを務める。伸びのあるシュートと正確なパスでチームを引っ張り、3年生でU―16日本代表に選ばれる。初めての世界大会では、世界との差を痛感したが、「丁寧な試合運びなど、日本の良さも再確認し、モチベーションにもつながった。

高校はハンドボール界で都内私立4強と呼ばれる佼成女子高へ進学。偶然にも5人の仲間は同じ高校を選択。更なる技術の向上を誓い合った。

しかし2年生の冬、「入生の中で、初めてハンドボールを辞めたいと思った」。仲間4人の成長を見て、劣等感や焦りを抱くように。「自分の武器って、強みって何だろう」。高校卒業後の進路で悩む時期とも重なった。「こんな気持ちで将来もハンドボールを続けられるのか」。

転機は、3年生の春の全国選抜大会の時だった。優勝したものの納得のいく試合ではなく、監督からもいつものように怒鳴られた。しかし試合後、普段は厳しい監督から「お前がチームの柱だ」と声をかけられた。「自分にはチームを引っ張り、支える力があると気付けた」と笑う。引退まで共に切磋琢磨した仲間とは、大学は別々だが今でも連絡を取り合っているという。

筑波大に入学した理由は「筑波には新しいハンドボールがある」と思ったから。入部当初は考え方の違いに戸惑った。最初の数ヶ月間はトレーナーに、無理をしすぎないよう注意された。部の選手層は決して厚くなく、一人の怪我が チームに大きく影響する。「休むことも大事という考え方が新鮮だった」。無理をしすぎないことなど、日々新しい考えや練習法に触れ、「毎日が未知との出会い」。

目標は「どんなシュートでも点に導き、常に安定して点を取れる選手」。大学卒業後もハンドボールを続ける未来を描く。「まずは今年の春季リーグ戦に向けて、全力で体作りに取り組みたい」（北沢佳苗＝比較文化学類1年、写真は本人提供）

学生宿舎 不法投棄問題

粗大ゴミ置き場正式設置

10年以上にわたり粗大ゴミの不法投棄が多発していた平砂・一の矢の学生宿舎周辺に、大学側が正式な粗大ゴミ置き場を3月末までに設け、宿舎の利用料を使って粗大ゴミの回収を始めることが学生生活課への取材で分かった。現場では学外者による不法投棄の可能性も指摘されていたが、新設のゴミ置き場はカギ付きで、問題解決の契機になると期待される。（徳永翼、写真も）

新設の粗大ゴミ置き場は平砂と一の矢両宿舎の周辺に2カ所設置され、周囲を塀で囲む。宿舎の学生は管理事務所でカギを借りて利用できる。家電リサイクル法で、家電量販店へ持ち込むなどの処分が定められている、洗濯機などの粗大ゴミも廃棄できる。

一の矢・平砂・追越学生宿舎のゴミ置き場周辺では過去10年以上にわたり、テレビや冷蔵庫などの家電製品、ソファーや本棚など家具の大量の粗大ゴミの不法投棄が続いていた。中には宿舎生活に不要な大型の業務用冷蔵庫や宿舎のベッドのサイズとは違うマットレスなどもあり、学外者が廃棄している可能性も指摘されていた。

これら不法投棄物は宿舎利用料から費用を捻出し処理してきたが、2008年には不法投棄された粗大ゴミを一時的に一カ所にまとめる仮設粗大ゴミ置き場に2カ所設置し、現在それを処分している。不法投棄物の総量は過去5年間で31トン。入居者が支払う共益費などから約1860万円を出し処理してきた。今年度もすでに約340万円を費やしている。

学生生活課の中村幸生主幹（宿舎・厚生担当）は「不法投棄の処分に多額の経費が使われており、改善も望めないため、正式なゴミ置き場を設置することにした。問題の根本的な解決には直結しない懸念もあるが、処分が楽にできるため、宿舎に居する学生には便利になるだろう」と話した。

一方、宿舎入居者は数年しか宿舎を使わないため、まだ使える家電が多く廃棄される可能性もある。一の矢・追越宿舎の共用棟にある家電販売店「アイデン」の店員の義政雄也さんは「まだ使える家電は、有料で買い取れる場合が多い。家電の処分を考えている学生は、ぜひ持ち込んでほしい」と話している。

宿舎のゴミ置き場周辺に不法投棄された粗大ゴミ（昨年3月17日、平砂宿舎で）

宿舎横の空き地に建設される粗大ゴミ置き場の設置予定地（1月19日、平砂宿舎で）

宿舎を問う

宿舎値上げ

改修など理由

4月から宿舎の利用料が改定され、月別で最大約4500円値上げされることがわかった。学生生活課によると、国から配分される予算の減額と、宿舎の老朽化に伴う改修費の確保、広さだけでなく設備に合った料金の設定が主な理由。

一般改修棟の利用料は1483円から1941円に4580円値上げされる。大幅な改定は平成21年以来で3回目。未改修棟も若干値上げされる。一方、2人部屋を単身で使用する場合だけは350円値下げされる。

また、改修は順次行われ、4月からは全室で無線LANが使用可能になり、24時間の対応も始まる。

記者の目

外部からの不法投棄防げ

宿舎付近への粗大ゴミの不法投棄は長年続いており、処分費は平成23年度から昨年度までの5年間で倍増していた。今回の正式な粗大ゴミ置き場設置が、宿舎に住む筑波大学生や住民が不法投棄問題を認識する契機となり、現状打開の契機になると期待したい。

問題は、大きな誤解から始まったと推測する。相次ぐ不法投棄の一因には、粗大ゴミの収集方法を正しく理解している学生が少ないことと、ゴミが山積みになっていた「仮設粗大ゴミ置き場」を、多くの学生や周辺の住民などが「正式な粗大ゴミ置き場」と誤認していた可能性があるからだ。だが問題は年、棚上げされ続け、ゴミの山が築かれた。そしてその処理には多額の宿舎費用が使われていたのだ。この経緯を踏まえると回、カギ付きで宿舎の学生しか使えない粗大ゴミ置き場が作られたのは意義がある。少なくとも、それは不法投棄を防ぐ一手段になるからだ。

設置を主導した学生生活課の中村幸生主幹は「かつて医学期のゴミ置き場にルールを守らずゴミが捨てられていた際、粗大ゴミ置き場にカギをかけただけで、利用マナーが大きく改善した。学生宿舎でもこれができないかと考えた」と設置の経緯を話すが、この判断は評価したい。

だが、懸念もある。今回設置される粗大ゴミ置き場は2カ所だが、学内には他にも不法投棄現場がある。こうした現場に、今後も学外者が廃棄を続ける可能性はある。今回の粗大ゴミ置き場の設置を機に、巡回を強化するなど、不法投棄を減少させる取り組みも必要だ。

春には宿舎の居住者が一斉に入退去を行い、例年多くの粗大ゴミが不法投棄される。正式な粗大ゴミ置き場の設置が問題にどう影響を与えるか、注視したい。（徳永翼）

「結」2号機打ち上げ

正常に動作し電波届く

筑波大学生が中心となって製作した人工衛星2号機「ITF−2 結2号」が「こうのとり6号」に搭載され、12月9日に打ち上げられた。筑波大では様子を中継するパブリックビューイングが同日に3A棟で行われ、学生ら約70人が参加した。

パブリックビューイングでは打ち上げ前に2号機の構造などの説明が行われたほか、打ち上げ場の種子島宇宙センター（鹿児島県南種子町）近くの公園の開発メンバーらと中継をし、現地の様子も報告された。

「ITF−2」を載せた「こうのとり6号」は午後10時26分頃、無事に打ち上げられ、会場からは拍手や歓声が上がった。

「ITF−2」は今月16日に国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」から宇宙へ放出。初期運用中で、正常に動作し電波が届いている。これから約1週間で、機能の確認作業などを行った後、超小型アンテナを用いた電波の送受信の実験などの任務を行う。

会場を訪れた学生は「初めてパブリックビューイングに参加し、とても興奮した。電波の送信が始まった際には実際に受信をしてみたい」と話した。

現地を訪れた開発チーム代表の永田晃大さん（エシス4年）は「ロケットの打ち上げに圧倒された。今後は衛星の運用開始に向けた準備を進めていく」と話した。（佐藤巧基、写真も）

「結」を搭載した「こうのとり6号」が打ち上がる瞬間を見る学生ら（12月9日、3A棟で）

世界の教室から

マサチューセッツ工科大学（米国）本多隆利

好環境で先駆者に学ぶ

現在、私は米国・ケンブリッジ市にある、マサチューセッツ工科大学（MIT）ピカワー学習・記憶研究所の留学生として、神経科学の研究に取り組んでいます。留学して第一に感じることは、学生や研究者にとって充実した環境が整えられているということです。例えば、MITから発行された学生証があれば、休日問わず24時間図書館や学内施設が利用可能で、日夜勉学に励むことができ、大変重宝しています。また、ハーバード大学をはじめとした近隣の研究機関との共同研究も活発で、現在私が所属する研究室でも定期的に議論を交わして共同プロジェクトを進めています。

留学の経緯として以前、日本で開催されたシンポジウムで現在の受け入れ先の教授の講演を聞き、その独創的な研究や手法に興味をもちました。論文などの情報だけではその高度な技術を習得することは困難だと感じていました。そこで、実際に自分の目で見て手を動かして学びたいと考え、修行をしたい旨を直接メールでお伝えしました。光栄にもシンポジウムの懇親会で質問したことを覚えてくださっており、すぐに受け入れ許可をくださいました。一方、実際の留学までにはさまざまな手続きが必要で、特にビザの取得には時間を要します。指導教員の先生の寛大なご理解や、大学院プログラムのサポートを通じ、この度の留学が実現できました。

MITに到着してすぐ、現在進めている研究やこちらで取り組みたいプロジェクトについてプレゼンしました。約2時間の長丁場で大変議論が盛り上がりました。特に先生からの言葉は、最前線を歩んできた専門家ならではの視点で今後の実験方針を定める上で貴重な情報となりました。

現在、ご指導をいただいているマシュー・A・ウィルソン先生は、マウスやラットの脳において、数百もの神経細胞の活動を同時に記録する技術を世界に先駆けて開発された方です。先生と話すたび、「そこに技術がなければ自分たちで作る。テクノロジーを通じて、まだ誰も知らない現象を観たい」という姿勢に強く感銘を受けます。実際に私が取り組んでいる研究もエンジニアリングの色が強く、プログラミングやものづくりの毎日です。作製したデバイスが上手く作動しなかったり、コードを書いてもエラーが表示され、試行錯誤の日々が続きます。ただ、続けているうちに、失敗の中にこそ学べる機会があると実感できるようになりました。何より、周りに高い技術と経験のある研究者が集っているため、積極的に質問をすることで、多角的なアドバイスをいただけます。

日々失敗しながらも、愉しく研究に向き合えるのは、ひとえに温かい研究室の方々のおかげです。

現代社会ではインターネットを通じて、世界中どこにいても得られる情報がほとんどです。一方で、さぞ限られた「環境」や、洗練されたスキルを有する「人」からしか学べない知識や技術が存在することも確かです。だからこそ、興味をもった時は、積極的に質問や連絡をして、明確な目的と感謝の意をもって学ばせていただく姿勢が大切だと感じています。

最後に、貴重な機会をご提供してくださった、文部科学省／日本学術振興会 博士課程教育リーディングプログラム、ヒューマンバイオロジー学位プログラム、（HBP）指導教員の柳沢正史先生に深く感謝しています。（HBP4年、日本学術振興会 特別研究員）

つくば市政務活動費

識者「情報公開推進を」

【1面参照】つくば市議会の政務活動費について、取材を通じて今後の課題などを探った。（井口彩、新田萌夏、平嶋健人）

■情報公開の透明性

つくば市議会の場合、政務活動費の収支報告書（概要）はネット上で公開しているが、その具体的な領収書は非公開。だが、高知県や神戸市などでは政務活動費の領収書をネット上で公開している。

政治学が専門の竹中佳彦教授（人社系）はこうした情報公開を推進した上で「ただ単に公開するだけではなく、市民にその解釈や説明を行うシステムも必要」と語る。実際にネット上からある市の政務活動費の収支報告書などを見ても、読んですぐに内容を理解することは難しいからだ。同教授は「議員や行政は説明責任を果たすべきだ」と話す。

また、政務活動費を調べる際必要となったのが、同費や交付申請手続き、報告書の書き方などについて記載してある「政務活動費の手引き」（つくば市議会作成）だった。

つくば市ではこの手引きはネット上では公開していなかった。一方で静岡市や三重県桑名市などではネット上から閲覧することができる。

つくば・市民ネットワークの宇野信子同市議員は「政務活動費について知ってもらうためには手引きを誰でも閲覧できるようにすることが必要」と話した。

■足りない？活動費

市民の関心高めよ

一議員あたり月額3万円が交付される政務活動費だが、各会派の収支報告書では支出額が交付額内に収まるのは9会派中3会派で、残り6会派は支出額が交付額を超えていた。

超えた金額の幅は29円から最大28万5840円とさまざまだった。政務活動費の使い方について、つくば自由民主党・つくば維新の会（現・自民つくばグラン・新しい風）の小久保貴史同市議員は「交付額が決まった後に会派内で年間のおおよその支出計画を立てる」という。

同議員によると、支出額を交付額に合わせるのではなく、活動内容を重視し、支出額が交付額を超えた場合は議員から徴収するというのが基本的な方針だ。

小久保議員も「今の月額3万円では少なく、5万円程度が妥当」と本紙に回答しており、現在の金額では足りないと感じる議員は少なくないようだ。

だが、山中八策の会の塩田尚同市議員は「会報費や毎月の研修費は自費で払わないとまかなえない」と話し、月10万ほどを自身の報酬から充てていると明かした。塩田議員は「議員活動でかかる費用を自費で払うような状況が続けば、議員を志望する人が少なくなるかもしれない」と懸念を示した。

■今後の課題

こうした中で、鍵となるのが市民の政務活動費への関心度だ。宇野議員は「市民から政務活動費の情報公開請求を行うなど、積極的に問題提起してほしい」と強調する。

昨年7月に本紙が行った調査によると、つくば市で市長・市議会議員選が行われることを知っていた筑波大生は5・6％で、市政への関心の低さが見受けられた。竹中教授は「日常の中で市との関わりが増えれば市政への関心が高まるだろう」と話している。

五輪への資金 TFFで募集

日下選手 2種目出場目指す

ボブスレーと円盤投げの2種目で五輪出場を目指す日下望美選手（平成24年度体育専門学群卒）の遠征費を支援者が集めるプロジェクトが、筑波フューチャーファンディング（TFF）で始まった。

日下選手は、ボブスレー日本代表と、円盤投げの五輪出場を目指す。夏冬両大会での五輪出場が達成されれば、史上5人目の快挙となる。

日下選手は中学3年からには日本学生対校選手権（日本インカレ）2位などの成績を残している。ボブスレーを始めたのは、小美玉スポーツクラブ所属後の25歳のとき。円盤投げと同様に瞬発力が必要なところに興味をもったのがきっかけだ。その年に受けた長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟のトライアウトに合格し選手に選ばれると、その後の全日本プッシュ選手権で2位になるなど、好成績を残している。

だが、競技を続けるのに困難も多い。円盤投げ・ボブスレーとも日本ではマイナー競技で、競技環境や支援が不足しているのが現状だ。また、プロ契約ではないため競技から収入を得ることができず、遠征費も自己負担となる。そこで、選手生活に集中できる環境を整えるため、支援者が遠征費を募集することを決めた。

プロジェクトでは、競技生活の必要資金を募集している。目標金額は100万円で、2月28日まで募集を行う。集まった資金は競技生活での遠征費や合宿強化費、競技用具代などに使われる。クラウドファンディングは最小で3000円から参加でき、金額に応じて活動報告書や日下選手とのトレーニング参加権、講演会に参加する権利などが与えられる。

日下選手は「2種目での五輪出場に挑戦することで、自分の持っている能力を使い切りたい」と今後の展望を語った。（橋野朝希）

T―1グランプリ

漫才や大喜利を披露

筑波大学生が主催するお笑いグランプリ「T―1グランプリ」が12月4日、BiViつくば（つくば市吾妻）で行われた。

3回目の開催となる今回は、学内外から過去最多の6組が出場し、20人以上が来場した。

出場者は漫才や講談など思い思いのネタを披露。優勝者は来場者の投票で選ばれ、接戦の末、漫才の中で別の漫才をする「漫才インサンド漫才」のネタを披露した猪狩弘大さん（医学4年）と池田晃一さん（同2年）のいかだグラッシィーズが王座に輝いた。

2人は「急に出場を決めたので、本番の1時間前にやっとネタができた。この窮地を勢いに変えられたことが優勝につながったので」と喜びを語った。

会場では大喜利や、事前に出されたお題に対して募集したボケを発表するコーナーなども設けられた。

主催した小林陽一郎さん（化学4年）は「以前は学内で開催していたが、今回、初めて学外で開催したことで多くの人に楽しんでもらえた。今後もより気軽におい笑いに参加できる企画作りをしていきたい」と話した。

来場した男性は「知り合いが出場するので見に来たが、予想以上に面白かった」と話した。（徳永翼、写真も）

ネタを披露するいかだグラッシィーズの2人（12月4日、BiViつくばで）

Free Education

地域の中高生に教育支援

放課後、中学校の教室からにぎやかな声が聞こえた。自習する中学生に勉強を教える活動は活気づいている。34人のサークルの会員は、教員志望だけでなく、教育に興味があったり中高生と触れ合いたいとの理由で入会した者も多い。

主な活動は月2～3回、市の許可を得て、放課後自習する生徒に勉強を教える「アフタースクール」だ。

「アフタースクール」では、桜中学校（つくば市金田）に赴き、自習中の生徒からの質問に答える。生徒がわかるまで問題を解説する中、時折、学生生活や中学生の日常などについて雑談を交わし、楽しいひと時を過ごしている。

「ゆるく、自由に、教育を」がモットー。サークルの会員たちは自分の予定が合うときだけ参加する。齋藤竜一さん（応理2年）は「空いている時間で中学生と触れ合えることがアプローチスクールの魅力だ」と語る。

悩みもある。会長の横尾夏澄さん（人文2年）は「話しかけられるのが苦手な子に声をかけたときに、無言で席を移動されたことがあり、ショックだった。一人ひとりの対応を考えなければ、と思った」と語る。

教え方に悩んだときは、会議で意見を戦わせる。正負の数を理解できない生徒には、数直線を使って視覚的に教えるなど教え方を工夫するとも考えた。さまざまな学類の学生が所属するため、多くのアイディアが出るのも強みだ。また、学校の先生に比べ、年の近い大学生だからこそ親しみやすいという面もあるという。

創立10年。塾でアルバイトをしていた創設メンバーが、経済的な理由から塾に行けない子どもたちにもきめ細かな教育を行う場が必要だと考え、「Free Education」という名前を付けた。

当時は、つくば市ではこのような取り組みが珍しかったが、現在では、「つくば未来塾学習チューター」として市で制度化。市内すべての中学校に波及したという。

また、中高生を対象にさまざまなイベントも企画している。生徒たちと交流を深め、サークルの会員のプレゼン能力やコミュニケーション能力を高めている。

昨年7月には、筑波大に高校生を招き模擬講義やディスカッションを行った。また、大学の授業の紹介や受験相談なども実施している。

大いに楽しみ、大いに真面目に取り組む。そういった学生活を謳歌している大学生たちの団体だ。

そんな彼らの姿を見て、中高生たちも大学生活に、楽しくかっこいい自分の姿を想像していることだろう。（石川泰行＝社会学類2年）

不動岡高校との交流会で高校生にプレゼンする横尾さん（昨年7月、3A棟で）＝Free Education提供

選挙カフェ

学生が議論を交わす

選挙や政治について学生と議員が話し合い、選挙への関心を深める「選挙カフェ」が12月4日に7A棟で開催された。

同イベントはNPO法人ドットジェイピーが主催。茨城県内の県・市議会議員5人と、筑波大学や茨城大学などから学生24人が参加した。

テーマは「どうして選挙に行かなきゃいけないの？」。昨年7月の参院選から選挙権が得られる年齢が18歳以上に引き下げられたことを踏まえ、若者の投票率の増加に向けた対策や選挙に行くことの重要性について、落ち着いた雰囲気の中で議論した。

参加した学生らは「立候補者や選挙の情報が少ないことが問題だ」「日常で政治と関わりを感じる機会が少ない」などと選挙制度の問題点を指摘。これに対し牛久市議会の伊藤裕一議員は「現状では選挙に関する情報を広める仕組みが整っていない。また政策の反映には時間がかかるため政治との関わりを感じにくいのでは」と話した。

（前名裕一＝社会学類2年、12面に関連写真）

Who's Who?

生活雑貨のコンテストで最高賞獲得

桜井亮汰 さん（芸専3年）

「Ｈａｋｏ Ｎｉｗａ」を持ち、ほほ笑む桜井さん（12 月 2 日、6 A 棟で）

昨年11月、ロフト（本社・東京都千代田区）が主催する生活雑貨のコンテスト「Ｌｏｆｔ&Ｆａｂ Ａｗａｒｄ 2016」に、ペン立を街や森に見立てた「Ｈａｋｏ Ｎｉｗａ」を出品し、最高賞となるＧＯＬＤ賞を獲得した。

長野県出身。子供のころから工作が好きで、折り紙やブロック遊びに熱中していた。小学4年生の時には、折り込みチラシを利用し、ワニのおもちゃを作った。尾の部分を引っ張ると舌や目の部分が動くように紙の折り方を工夫した。同級生からは「自分もほしい」と評判になり、クラス全員分を作成したという。

中高ではバレーボール部に所属し、ものづくりから一時は遠ざかった。大学受験の際、自分の進路に悩んでいると、幼少期、何かを作ることが好きだったことを思い出した。「やはりものづくりがしたい」。そう思い、筑波大の芸術専門学群への進学を決めた。

高校まで専門的な勉強はしてこなかったため、作品作りで使う3Dソフトの使い方も一から勉強した。制作する作品のほとんどは、授業の課題で作ったもの。「Ｈａｋｏ Ｎｉｗａ」も、今年の春に受講した「情報・プロダクトデザイン演習Ⅰ」で制作した作品を基に出品した。

同作品は、色の違う5層からなるペン立てを、森や街、その下に広がる地層の様子に見立てたもので、一番上の層は鉛筆やペン立てに、それ以下の層はクリップや消しゴムの収納に使える。用途と色の異なる5層を自由に組み合わせることで、使用者が自由に使えるようにした。一番上の層は2種類。森をイメージしたものは、鉛筆に葉や羽根の形のキャップをつけてペン立てに差すことで、木や風車を思わせる。また街をイメージしたものは、高層ビルの形をしたペン立てにボールペンなどを差すことができるようにした。

制作には3Dプリンターを利用。パソコンで作品の形をデータ化し、プリンターで出力する。表面が荒くなるため、あとで磨くのが普通だが、「荒い仕上がりが逆に地層のような作品のイメージに合っていた」ため、あえてそのままにした。また、消しゴムなどを入れる層の仕切りを骨の形を模したものにした。「化石の骨が地面に埋まっているのを意識した」。3Dプリンターは1つの部品を出力するだけでも10時間かかり、1日5時間ほど作業し、約1ヶ月かけて完成させた。

コンテストには初めて応募したが、審査員からは機能性とデザイン性が評価され、最高賞を受賞した。受賞を知った時は、「信じられなかったが、じわじわと喜びが込み上げてきた」。

昨年末には、つくば美術館で開催された「つくばメディアアートフェスティバル」に、転がすと音が鳴るカエルのおもちゃ「コロガエル」を出展。来場者からは「転がすと音が出るのが楽しい」と反響があった。将来は「文房具や家電などの幅広いものづくりに携わりたい」という。ものづくりの魅力は「自分が作りたいものを形にできること」。

次は「Ｈａｋｏ Ｎｉｗａ」の一番上の層に、家の形をした鉛筆削りなどの新たなパーツを付け足したいと笑顔で話してくれた。「いつか売ることができれば」。彼の発想力と新たな作品に、今後も期待したい。（徳永翼＝日本語・日本文化学類2年、写真も。5面に関連記事）

子供のころからものづくり
豊かな発想力を持って制作

編集後記

イラン学生通信をご存知でしょうか。宗教色が強い国の圧力に負けず、中立報道を保つ数少ないメディアです。先日はイスラム教関係者のスキャンダルを報じ、反響を得ました。記者も学生ばかりながらイランで最優秀メディアにも表彰されています▼今号では宿舎の粗大ゴミ置き場を取り上げました。今後も宿舎の諸問題が解決するまで注視していきます▼また、つくば市の政務活動費について情報公開請求を行い、調査しました。昨今、問題になる政務活動費ですが、私たちが支払う税金が適切に使われるためにも、監視の目を光らせていきます▼本紙は今号より、編集幹部が3年生から2年生になりました。先輩方が引退し、未熟な1・2年生が中心となりますが、日々精進を重ね、学内にとどまらない広い視野で問題を発信し続ける新聞を作っていきたいと思います。（編集長・小宮山瑛生＝社会学類2年）

次号は
4月7日（金）
発行予定です

古市憲寿さん講演

学内総合

社会学類の授業「現代社会論」の一環で講演する社会学者の古市憲寿さん（12 月 2 日、1 H 棟で）＝深作歩美撮影

2 面へ

ラグビー 関東学生対抗戦

スポーツ

前半 38 分、トライを決める鈴木啓太（12 月 3 日、帝京大戦で）＝岡田優太撮影

8 面へ

バレー 全日本インカレ

スポーツ

高さを生かし、相手コートに鋭いスパイクを打ち込む土井さくら（12 月 4 日、鹿屋体育大戦で）＝佐藤巧基撮影

8 面へ

選挙カフェ

学生生活

活発に意見を交し合う参加者ら（12 月 4 日、7 A 棟で）＝石川泰行撮影

11 面へ